

佐賀県文化財調査報告書第30集

# 姫 方 遺 跡

—三養基郡中原町—



佐賀県教育委員会

## はしがき

三養基郡中原町姫方段丘に住宅団地が造成されることになり、整地作業が開始されたのは昭和47年2月ごろのことであった。3月に入って遺跡の緊急調査が実施され、その後断続的に調査が継続されて調査が一応終了したのは49年1月のことであった。

この間、この遺跡の調査と保存の問題をめぐって論争され、県議会または国会でもこの問題がとりあげられるに至った。この姫方遺跡の問題は、基本的にはこの遺跡のもつ重要性に起因していることはいうまでもないが、国土開発が急速に推進される過程において、自然と歴史的文化遺産が破壊されつつあることに対する一つの警告であり、また、文化財保護行政に対する痛烈な批判であったと考えられる。県教育委員会は、この姫方遺跡問題を契機として文化財保護行政の強化を図るとともに、姫方遺跡の中、雌塚・方形周溝墓・環状列石土塗墓の3点について永久保存の措置を講ずるに至ったのである。

姫方遺跡は、数百組に及ぶ弥生時代の甕棺墓の群集遺跡であり、この甕棺群の他に、石棺墓・土塗墓・環状列石土塗墓や方形周溝墓、または雄塚・雌塚などの古墳が築成されていた弥生時代から古墳時代にかけての墳墓の複合遺跡として、墓制史上極めて重要な位置を占めるところの遺跡であった。約2か年にわたる調査において、調査担当者も調査のたび毎に代わり、この調査報告書をまとめるに当って幾多の困難が伏在していたことが考えられる。しかし、この遺跡に寄せられた多くの人々の強い関心にこたえるため、困難を克服して本書をまとめていただいた執筆者等に対し、深く感謝の意を表する次第である。

最後に、この遺跡の調査が継続された2か年の間、文化庁・県議会・中原町当局および教育委員会・大倉地所株式会社をはじめ多くの方々に多大のご迷惑をおかけいたしたことを深くおわび申し上げるとともに、文化財保護に対する一層のご協力をお願い申しあげます。

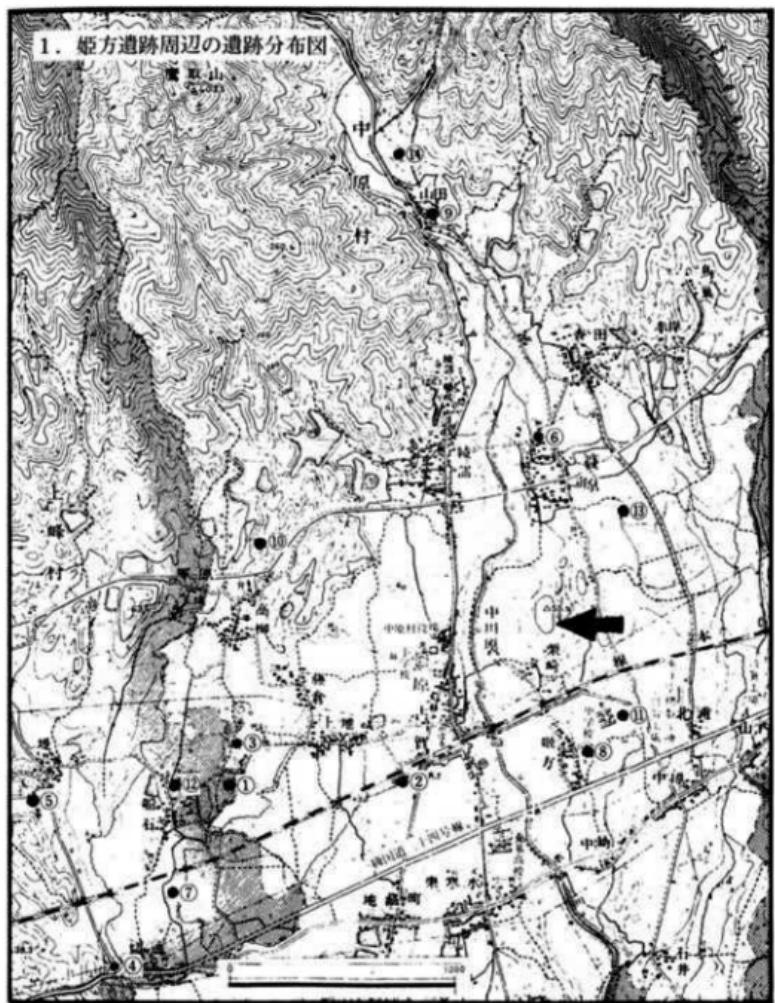
昭和49年3月20日

佐賀県教育委員会

教育長　瀬戸口　芳夫

# もくじ

I	遺跡の環境	2
II	調査の概要	7
III	造構・遺物	14
1.	雄塚	14
2.	雌塚	16
3.	方形周溝墓	18
4.	環状列石土塙墓	21
5.	土塙墓	21
6.	石棺墓	27
7.	甕棺墓	31
8.	住居址	45
9.	その他の遺物	47
VII	総括	49
図版		59



⇒姫方遺跡

- ① 西草水弥生櫛棺遺跡
- ② ドンドン落弥生櫛棺遺跡
- ③ 上地第1号弥生櫛棺遺跡
- ④ 切通遺跡

⑤ 四本谷弥生遺跡

- ⑥ 八幡社櫛棺遺跡
- ⑦ 船石櫛棺遺跡
- ⑧ 姫方原遺跡
- ⑨ 山田古墳群

⑩ 大塚

- ⑪ 姫方前方後円墳
- ⑫ 谷渡古墳群
- ⑬ 萩原古墳
- ⑭ 山田藏骨器出土地

## I 遺跡の環境

### 1. 地理的環境

三養基郡中原町大字蓑原1237番地に姫方遺跡は所在していて、調査対象面積は39.600m<sup>2</sup>である。脊振山系の標高 847.5m の九千部山や標高 754.5m の石谷山などの南山麓に、南北 1.500m 、東西 350m 余りの南北の方向にのびる独立低丘陵があるが、この姫方遺跡はこの低丘陵の北端のところに位置している。

この丘陵には、標高55.9m の三角点が設けられている。調査地区の西側水田面の標高が39m 余りであるので、この丘陵の比高は大体17m 余りである。

この丘陵は、洪積世の花崗岩質の砂礫層であって、寒水川などによって形成された河岸段丘である。北は約 500m で脊振山系の主峰の山麓に接するが、この間を県道鳥栖川久保佐賀線が東西の方向に走り、県道を中心にして蓑原部落の集落が形成されている。西側には寒水川の本流が南下し、東側には寒水川の支流が南流していて、その流域は水田地帯として開発されている。この丘陵の中心部を国鉄長崎本線が切断して東西の方向に走り、南端には国道34号線が東西の方向に通じている。

この丘陵上には、中原中学校が設置されており、また住宅団地もつくられていて開発が相当に進んでいる。

### 2. 歴史的環境

姫方遺跡の北方 2.500m および 3.300m の寒水川上流の谷あいに、鷹取山東麓縄文遺跡や吉田原縄文遺跡があり、東方 1km のところに笛吹山の低丘陵が南へのびているが、そこに笛吹山縄文遺跡が所在している。

姫方遺跡の北方蓑原部落に鎮座する八幡社の境内に弥生甕棺遺跡があり、この遺跡の西方約 1km のところに上地部落があるが、この低段丘には、上地弥生甕棺遺跡（松尾禎作「中原村上地かめ棺遺跡」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第10輯、昭和26年3月31日発行）・ドンドン落弥生甕棺遺跡（松尾禎作「佐賀県考古大観」昭和32年3月10日発行）などの弥生遺跡が分布している。

東方の笛吹山丘陵に、笛吹山古墳群（松尾禎作「笛吹山古墳群」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告第8輯、昭和24年5月31日発行）、北方 2km の山田部落の谷あいに、山田古墳群（松尾禎作「中原村の史話伝説」昭和30年11月3日発行）や鷹取山古墳（佐賀県の遺跡）があり、北方至近の蓑原部落には、八幡社境内古墳や、蓑原古墳が分布している。また西方 1.3km 余りのところには、大塚古墳・巖島神社境内古墳または塚原古墳群（中原町の史話伝説）などがある。

この地方は、かつては三根郡に属していて、肥前風土記に、「三根郡、郷陸所・里十

七・駅壠所」とあって、物部郷・漢部郷・米多郷の3郷を挙げている。姫方遺跡は、三根郡6郷の中の漢部郷にあって、後世に於ては一般に綾部郷と記され、中原町に綾部の部落名を伝え、また、綾部神社が鎮座している。漢部郷については、風土記に次のように記されている。「漢部郷、郡の北に在り。むかし、来目皇子、新羅を征伐せんとして、忍海漢人におおせて、将来てこの村にすえて、兵器を造らしむ。因て、漢部郷という。」

### 3. 姫方段丘遺跡

姫方遺跡が所在している姫方段丘は、南北にのびる小段丘にすぎないが、遺跡が極めて濃密に分布していて、段丘全体が遺跡であるといつても過言ではあるまいと思われる。一部から縄文式土器片も発見されてはいるが、弥生時代と古墳時代の遺跡が中心をなしている。しかし、遺跡の大半は、中学校や住宅などの建設、または鉄道の開通や神社の鎮座などによって破壊されていて、遺跡の全貌を明らかにすることはできない。

北端の姫方遺跡は、住宅団地造成によって、南端の国道に接する姫方原遺跡も住宅団地造成によって、ともに遺跡は壊滅してしまった。この姫方段丘の遺跡について、「中原村の史話伝説」に次のように記されている。

「姫方遺跡の中心として最も遺物等の出るところは現在の中原中学校付近・姫方原・堂屋敷あたりである。現在の中学校舎の北方鉄道線路付近の旧高橋付近からおびただしい甕棺がかけて鉄道開通の時出たといわれ、旧幼稚園運動場西方にも往々甕棺を見かけたことは筆者の記憶にも残っているし、昭和始めの古賀孝君の踏査記にも出ている。住居址で今確認されたところは、天満宮の西方鳥居の石段から野口氏方に下る坂の北の1570番地竹林の所や、中学校の便所付近、或は鉄道に沿う村道のがけ際、堂屋敷などで書て筆者は僅かに残る住居址の一部を吉田次郎君等としらべたことがある。」

昭和23年7月から9月にかけて、村道沿の崖の土取りあとに見える住居址を発掘したがそれは全体の4分の1か6分の1程度で、復原形は隅丸方形と思われ、現地表下1尺7寸位の所が竪穴の床であった。付近から石斧その他石鎌・石庖丁・石槌などが出ていて、竪穴内部からは黒曜石の剝片が3、4片出ただけである。また、この姫方付近から表面採集された石器には、笏形大石斧・蛤刀石斧・石鉗・石槌などがある。

北端の姫方遺跡からは、住居址も若干発見されてはいるが、遺跡の性格は弥生から古墳時代にかけての墓地群であって、甕棺墓・石棺墓・土塚墓・環状列石土塚墓・方形周溝墓・古墳など各種の墓が营造されていて、この遺跡の価値を高からしめている。とくに、数百組に及ぶ弥生甕棺墓は、県内においては他に殆んど類例をみないものであって、弥生時代における当地方の農耕社会の著しい発達を物語っているものであろう。

古墳は、雄塚・雌塚の他に、雌塚の南方100m余りの西寄りに小円墳1基があり、内

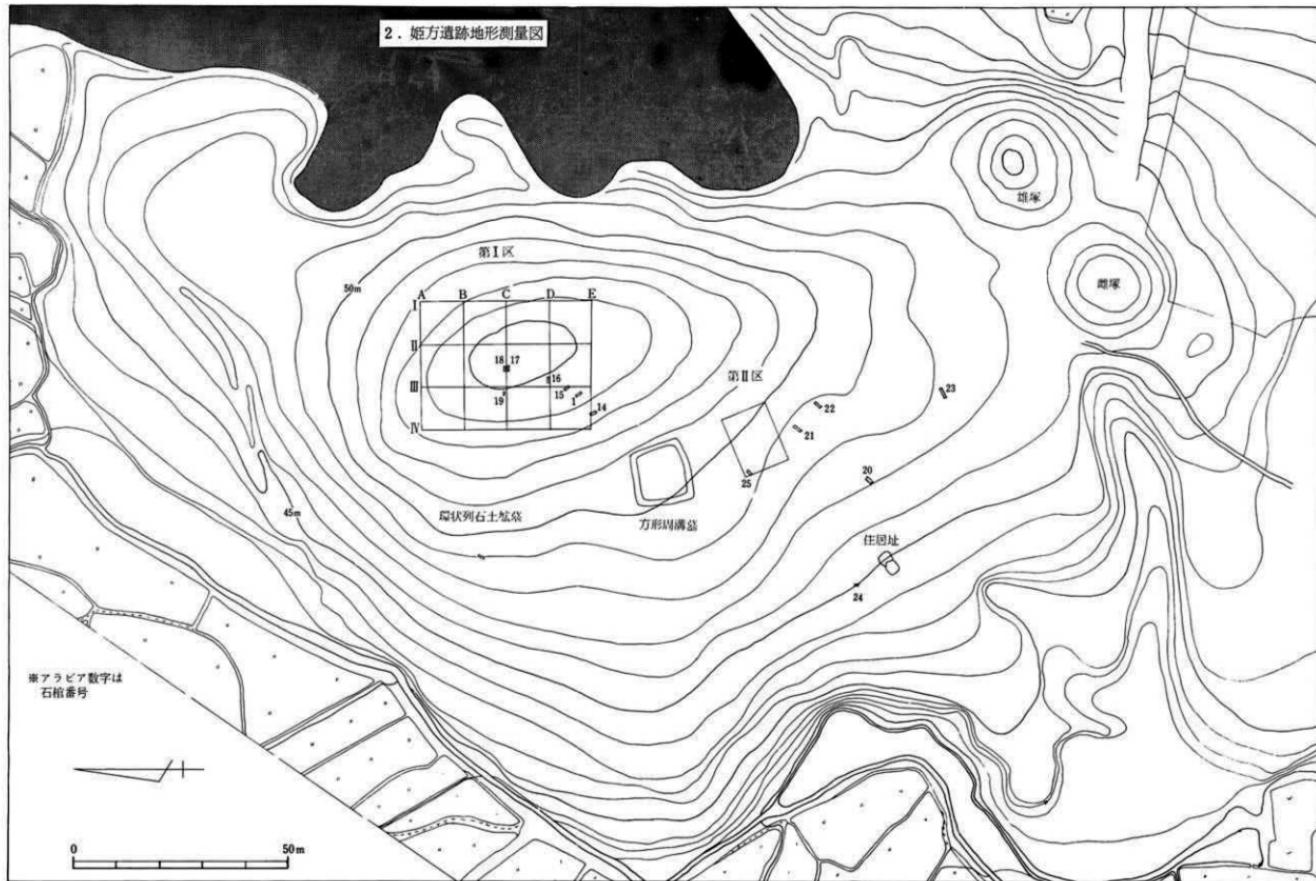
部主体は丹塗りの小石室であった（中原村の史話伝説）といわれるが、この古墳は現存していない。また、鉄道線路の南側にある中原中学校の校庭に、破壊された前方後円墳1基が残存していた（中原村の史話伝説）。

文献や現地踏査によって確認される姫方段丘に营造された古墳は以上の4基であるが、この段丘の最高所である三角点付近には、須恵器片の散布がみられるとともに、封土らしい痕跡をとどめている点からみて、古墳が築成されていたのではないかと考えられる。要するに、今日この姫方遺跡に营造された古墳の実数を明らかにすることはできない。

この段丘の南端に位置する姫方原遺跡からは、弥生時代の住居址群を中心として、方形周溝墓1か所が発見されている。中原中学校西側の未整地一帯にも土器片の散布が相当多いので、住居址の存在が推定される。

姫方段丘には、鉄道線路付近を境として、その南と北とには性格を異にした遺跡群が形成されていたのではないかと考えられ、南側の姫方原遺跡は住居址群を中心とする遺跡、北側の姫方遺跡は甕棺墓・古墳などを中心とする弥生から古墳時代へかけての墳墓群遺跡として一応把握することが可能ではなかろうか。

2. 姫方遺跡地形測量図



## II 調査の概要

### 1. 調査に至るまでの経過

姫方段丘の北端付近に、大倉地所株式会社が住宅団地の造成を計画し、工事に着手した。しかるに、この住宅団地造成予定地内に、古墳が存在していることが県教育委員会へ通報されたので、47年2月7日に県教育委員会の文化財担当者は現地調査を行なうとともに、中原町教育委員会と協議して、次のことを確認した。

古墳・甕棺の調査が終了するまでは工事に着手しない。調査期間は約1か月。発掘調査を県に依頼されても年度内は不可能である。調査費は概算150万円で、原因者負担とする。

その後、2月9日・2月16日に県教育委員会と中原町および同町教育委員会、大倉地所株式会社との間において対策が協議された。

### 2. 第1次調査（発掘調査）

#### ○調査期間

昭和47年3月13日～3月31日。

#### ○発掘調査委員会の組織

委員長 権藤 鎮雄 (中原町教委教育長)

事務局員 青柳 智男 (中原町公民館主事)

調査主任 木下 之治 (県立博物館副館長)

調査員 尾形 徳之 (県教委文化室主事)

柳川 俊二 (全上)

柴元 静雄 (全上)

木下 巧 (県立博物館学芸員)

森 醇一朗 (全上)

松隈 嵩 (県遺跡調査員)

大隈 悟 (全上)

藤井 要 (佐賀大学生)

#### ○調査を実施した遺構

古墳（雄塚・雌塚） 2基

環状列石土塁墓 1基

箱式石棺 14個

甕 棺 8組

○発見された副葬品等

内行花文鏡 1面 (雄塚)

鉄劍 1口、鉄刀 1口 (雌塚)

第1次調査においては、表面観察により確認された古墳2基と、この遺跡の最高處である三角点付近の調査に重点をおいて実施した。表土下30~40cmのところに、不規則な配石遺構が発見されたため、その下を更に掘り下げたところ地表下1.5m前後のところに甕棺が埋蔵されていることが判明した。その結果、この三角点周辺に相当数の甕棺が埋蔵されていることが予想されるに至ったが、調査終了予定期日の3月31日をもって調査を打切った。

### 3. 第2次調査（応急調査）

○調査期間

昭和47年4月上旬~5月中旬

○調査者

佐賀大学教育学部助教授 磯谷 誠一

佐賀大学考古学研究会

○調査を実施した遺構

甕 棺 170組

石棺・土塙墓など

○発見された副葬品等

小形貝釧 2個 (甕棺内)

遺 体 80体 (甕棺内)

○調査概要

4月上旬に至り、ブルドーザによる土取り作業が開始されると、甕棺等が出土したため、応急調査が実施された。調査地域は、三角点付近を中心とする約630m<sup>2</sup>であって、合口甕棺・单棺・小児甕棺等の他、石棺墓や土塙墓なども発見され、この遺跡の重要性が確認されるに至った。

なお、この調査前に300m<sup>2</sup>の採土作業がすでに行われていて、約70~80組の甕棺が破壊され湮滅してしまったと推定された。

### 4. 第3次調査（発掘調査）

○調査期間

昭和47年5月30日~7月28日

○緊急調査委員会の組織

委 員 長 大園 弘 (県教委教育長)

事務局長 熊谷 正門 (県教委社会教育課長)

委員 鏡山 猛 (県文化財専門委員)

七田 忠志 (全上)

木下 之治 (県立博物館副館長)

調査主任 安本 雪男 (県教委文化室長補佐)

調査員 柳川 優二 (県教委文化室主事)

柴元 静雄 (同上)

山本 弘道 (同上)

松隈 崇 (県遺跡調査員)

大隈 悟 (同上)

調査補助 天本 洋一

七田 忠昭

特別調査員 磯谷 誠一

○調査を実施した遺構

方形周溝墓 1基

甕棺 144組

箱式石棺 12個

土塙墓 4基

○発見された副葬品等

紡錘車 1個

鉄剣 1口 (石棺内)

鉄片 1個 (甕棺内)

石剣 1口 (土塙墓内)

ブレイド 10個

阿高式土器片 若干

○調査概要

最初1か月間の予定であったが、調査を終了することが不可能であったので、調査期間が延長された。6月23日に県議会文教厚生常任委員会の現地調査が行なわれ、6月27日に県文化財専門委員の意見を聞き、対策を講ずることにしたが、7月3日からは県議会においてこの姫方遺跡についての質疑が行なわれた。7月22日と25日の両日、対策協議会を開き、25日に採土工事の中止を業者に申し入れた。

7月22日から3回にわたって、「自然と文化を守る会」から要望と申し入れが行なわれた。

ブルトーザによる土取り作業中、丘陵の最高部で多数の甕棺が出土したので、この部分を中心に発掘調査を実施した。10×10mのグリッドを設定し、東からⅠ～Ⅶ区、北かやA～Dと呼称した。

6月17日までは主としてC・Dの6区の部分のスコップ等による表土除去を行ない、甕棺の土塙ラインの確認を重点をおいた。土塙は地表面から40～60cmの深度で確認不可能であった。ⅦC・ⅦD区の調査結果から北側のN・B区へと甕棺区域がのびていることが推定された。土塙ラインが明確になった分については、土塙ラインの切り合い順に内部の排土作業を行なった。

7月1日からはA・B区の表土除去作業を開始した。表土から約30cmまでの排土には小型ブルトーザを使用した。甕棺土塙ラインの確認を行なったが、A区の北半分では遺構の確認はできなかった。全区の土塙ライン確認後、ライン内の排土を行ない、実測写真撮影および人骨の取り上げ作業を7月28日まで継続した。

甕棺は弥生時代中期に属するものが、その主流をなしているが、ⅦA区においては後期まで降るものも出土した。甕棺の埋置は、斜位と水平の2種に大別され、深度は最も深いもので約2mであった。その大部分は合口甕棺であったが、土塙墓と推定されるのも4か所から発見された。

甕棺調査と併行して、丘陵の南部分でステッキボーリングによる遺構の調査を行ない、石棺4個を確認し、石棺の蓋石の部分まで排土した。7月17日からⅦD区に接して、南方斜面に黒色土が確認されていた部分の表土を排除した結果、方形周溝墓の存在が確認されるに至った。

今後の調査方法あるいは遺跡の保存対策を検討するために、7月28日をもって発掘調査は一応中止して、地形測量のみを継続することにした。

## 5. 第5次調査（遺構確認調査）

### ○調査期間

47年8月17日～8月31日

### ○調査担当者

調査主任 柴元 静雄

調査補助 天本 洋一

七田 忠昭

### ○調査概要

8月5日 文化庁記念物課三輪調査官の現地視察があり、その意見を聞いて対策が協議され、残存部分の遺構確認調査を実施することとなった。この丘陵の北斜面の松林、

西斜面および南端部に7本トレンチを設定した。トレンチは幅1mで、総延長は600mである。不明確な落ち込みが西方斜面のトレンチ内で発見されたが、明確な遺構や遺物は発見されなかった。

#### 6. 第5次調査（遺構確認調査）

##### ○調査期間

昭和47年9月7日～9月18日

##### ○調査担当者

調査主任 柴元 静雄（県教委文化課主事）

調査員 木下 之治（県教委文化財調査監）

松隈 崑（県遺跡調査員）

大隈 悟（同上）

調査補助 天本 洋一

##### ○調査を実施した遺構

石棺 2個

甕棺 4組

住居址 2戸分

##### ○調査の概要

この第2次の遺構確認調査においては、丘陵の西および南斜面に、延長300mのトレンチ2本を設定した。その結果、石棺・甕棺・住居址などが若干分布していることが確認された。住居址は、一部を切り合って営まれている竪穴式住居址で、出土した土器片からみて古墳時代前期ごろのものであろうと推定される。甕棺は単独出土であって、群としての拡がりは推定されなかった。南斜面のトレンチ内から発見されたU字状の堀込み遺構は、相当数の土器片を包含していたが、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

#### 7. 第6次調査（発掘調査）

##### ○調査期間

47年9月20日～9月30日

##### ○調査担当者

調査主任 柴元 静雄

調査員 木下 之治

調査補助 天本 洋一

##### ○調査を実施した遺構

甕棺 35組

石棺 3個

#### ○調査の概要

2次にわたる遺構確認調査の結果、遺構の分布する範囲が大体推定され、北・西・南の方向へは余りひろがっていないことが判明した。そこで、丘陵頂上部の甕棺群集地域の調査を継続するとともに、その埋蔵が確認されていた3基の箱式石棺の発掘調査を実施した。なお、方形周溝墓については、内構部および周溝内の調査は実施せず、原状で保存し、周溝の南に近接した部分の甕棺群についても調査は実施せず保存した。

### 8.第7次調査（遺構所在調査）

#### ○調査期間

47年12月13日～12月22日

#### ○調査担当者

文化課文化財担当者

#### ○調査概要

土取り工事現場に1名づつが立会し、遺構が発見された場合は、その場所の工事を中止させ、応急調査を実施することにした。

9月22日、竹下副知事の現地視察、9月30日には中原町主催の姫方遺跡講演会が催された。10月に入ると、大倉地所株式会社と保存遺構について、具体的な交渉が行なわれ、11月7日には文化庁の三輪調査官の再度の現地視察があった。

12月9日から本格的な土取り工事が開始されたが、12月11日に佐大磯谷助教授から、土取り作業中に甕棺が出土しているので作業を中止して調査を実施して欲しいとの申し入れがあった。12日に係員が現地調査を実施した結果、断面に甕棺5組と取り上げられた3組の甕棺の存在が確認された。そこで、13日から係員1名づつが交代で工事現場に立会うことになった。

12月14日、姫方遺跡協議会は、池田知事・県議会文教常任委員会あて姫方遺跡保存に対する声明文を送付した。同日、県教育委員会は、電話で地権者に対し姫方遺跡の土取り工事の中止を申し入れた。

### 9.第8次調査（遺構確認調査）

#### ○調査期間

48年3月3日～3月31日

#### ○調査担当者

木下 之治

#### ○調査を実施した遺構

土塙基 3基

#### ○調査の概要

遺構が残存している可能性のある方形周溝墓の北・南・西の3方に、幅1.5mのトレ

ンチ12本を設定したが、その総延長は230mである。この第8次調査の結果、姫方遺跡で遺構が現存している地域は、方形周溝墓の南側20×20mの範囲であって、甕棺群遺構であることが確認されるに至った。

#### 10. 第9次調査（発掘調査）

##### ○調査期間

48年4月9日～4月19日

##### ○調査担当者

調査主任 木下 巧（県教委文化課主事）

調査員 木下 之治

天本 洋一

##### ○調査を実施した遺構

石棺墓 1個

甕棺墓 37組

##### ○調査の概要

第8次遺構確認調査で残存遺構が明らかとなった方形周溝墓の南側、東西20m、南北15mの範囲の発掘調査を実施した。

#### 11. 第10次調査（発掘調査）

##### 調査期間

49年1月16日～1月30日

##### ○調査担当者

木下 巧

天本 洋一

##### ○調査を実施した遺構

方形周溝墓 1基

##### ○調査の概要

方形周溝墓はその存在が確認されたのみで、発掘調査は実施していなかった。この調査は保存するための前提として、遺構の性格を明らかにするため、周溝内と内椁部の発掘調査を実施した。

### III 遺構・遺物

#### 1. 雄 塚

雄塚は、雌塚の東北方に約15mの間隔をおいて、雌塚と相対して築成されていた古墳であって、この2基の古墳は相類似した規模のものであった。雄塚は封土の径約30m・高さ3.5m余りの円墳で、周濠・埴輪・葺石などの外部施設は認められず、墳丘上には石造不動尊と石祠とか奉祀されていた。

この雄塚については、「中原村の史話伝説」(松尾楨作著。昭和30年11月3日、中原村公民館発行)に、次のように記されている。「古墳上には今中川原の江越秋三郎氏によって石祠が祀られている。この下には喜代氏によって発掘された石櫃があったというから石蔵か豎塙式の石室古墳があって、その中から倣製六弧鏡を出したのであろう。氏から聞いた所では墓の非常にきれいな朱詰の屍体があったといわれ、またその石室の屋根が合掌式であったと聞いている。豎塙の石蓋を合掌にした例は今のところ佐賀県にはここ以外にはない。内行花文六弧鏡は筆者も見たが倣製鏡としては非常に優秀なものであったが、崇りがあるというので取りもどして再埋葬、石祠を建てられたのである。」

この記事によって、雄塚が土地所有者によって発掘された盗掘墳であることが判明し、地元の人の言によれば発掘されたのは40年余り前のことであるといわれる。封土の地表下約80cm余りのところに小形の箱式石棺が設けられていて、頭骸骨が安置され、内行花文鏡1面がおかれていた。この石棺は、土地所有者がこの古墳を発掘した後、古墳の内部主体の石材を用いて再構築したものであった。

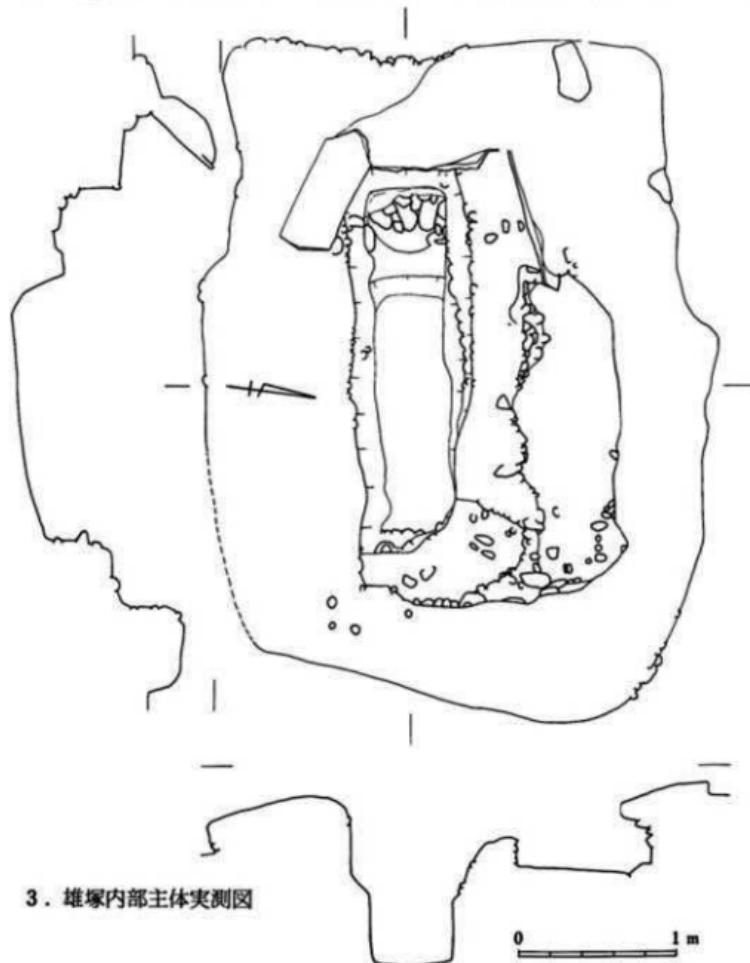
この古墳の内部主体は、再構築石棺の下にあって、封土面下120cm前後の地点に残存部分の上端、190cm余り下方に床面が残存していた。この内部主体は、かっての発掘に際して破壊されているため、原状を復原することは困難であり、また、その構造を明らかにすることも不可能であった。再構築されていた箱式石棺の石材は、内部主体を破壊した際の石材をもって構築されており、この石材の周囲および石棺の下部にも破壊石材が多く堆積されていた。

内部主体は、主軸の方向を東西にし、2室が並列して設けられていた。南側のものが主室で、北側のものが副室となっている。主室は、長さ2.1m、幅45~50cmで、現存部分の深さ0.7~1mである。この主室は2室となっていて、西端に長さ55cm、幅45cm前後の、小室が付設されているが、その床面は主体部より30cm余り高くなっている。

北側の副室は、長さ1.9m、幅40~60cm、現存部分の深さは20~45cmである。この主室と副室は、東西3.8~4.2m、南北2.7~31mの方形に近い平面を呈する粘土層をもって包まれているが、この粘土層の中には多くの小石が含有されている。3個の扁平板

石が残存していて、石室か石棺が構成されていたことは推定されるが、その構造は明らかでない。「中原村の史話伝説」に、合掌式石室と記されていることを裏付けるように、残存している石材は、内側へ傾斜しているが、築成された当初の構造を推定することは困難である。

扁平な安山岩の板石を内側に傾斜させて立て並べ、その外側に小石を積み重ね、更に粘土で覆って構築された特殊な構造を有する竪穴式石室ではなかったかとも考えられるが、その規模からみて石棺であった可能性もあり、その構造を具体的に知ることはでき



ない。この扁平板石はこの丘陵には産出しないので、他から運ばれてきた石材であり、石室の内部には鉄丹が施されていた。

主室の西端に付設されている小室は、副葬品の埋納施設ではなかったかと推定されるのであるが、再埋置された内行花文鏡1面以外の副葬品については明らかでない。

唯一の副葬品である内行花文鏡は、做製ではあるが質はよく保存も良好で、径10.8cm、面反り0.2cmである。外縁に素文帯があり、その内側に銘文、更に櫛齒文が配され、六花文帯があって、中央に鉢が鋳出されているが、花文と鉢座との間には珠文が配されている。花文帯と鉢座との間に、珠文が配されているのは、佐賀郡大和町小隈古墳出土の内行花文鏡1面のみではないかと考えられ、この雄塚出土の花文鏡との同范鏡は県内からはまだ発見されていない。

## 2. 雄 塚

封土の径約32m、高さ3.5m余りの円墳であって、周濠・埴輪・葺石などの外部施設は設けられていない。内部主体は、墳丘中央部の封土面下約1mのところに設けられた並列する2個の礫椁墓である。礫椁は20~30cmの間隔をもって東南—西北の方向に設けられていて、東北側の第1号は、長さ4.9m、幅1.5m、西南側の第2号は、長さ4.7m、幅1.3m余りであって、僅かばかり第1号礫椁墓の規模が大である。

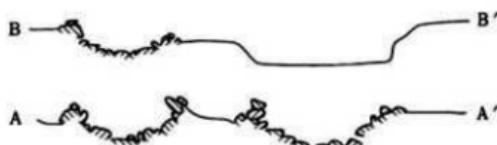
径8~20cm前後の花崗岩の礫を壁面から床面まで密に敷きつめ、粘土をもって礫を固定して構成されている。残存部の壁面から床面までの深さは40cm内外であって、その断面は半円形を呈している。第1号の平面は長方形に近く、第2号は隅丸長方形を呈している。すでに盗掘にあっていて、礫椁の一部は破壊されているため、原形を正確に知ることはできないが、当初は壁面がもっと高かったのではないかと推定される。

天井石としての機能を有する扁平板石は残存せず、礫椁の断面が半円形を呈している点からみて、刳抜きの木棺が納められ、礫椁はその外部施設ではなかったかとも考えられる。礫はこの丘陵に産出する花崗岩であり、内部には雄塚と同様に鉄丹が施されている。しかし、鉄丹は雄塚の方が極めて鮮明であるのに対して、雌塚の方は僅かにその痕跡をとどめているにすぎない。雄塚の鉄丹は石室を構成している石材に直接塗布されているのに対して、雌塚の方は礫椁に直接施されたものではなく、間接的に礫に付着しているのではないかという印象を与える。すなわち、礫椁の内部に木棺が設けられていて、これに塗布された鉄丹が礫に残存しているのではないかと考えられ、この点からも木棺の存在が推定されるのではなかろうか。

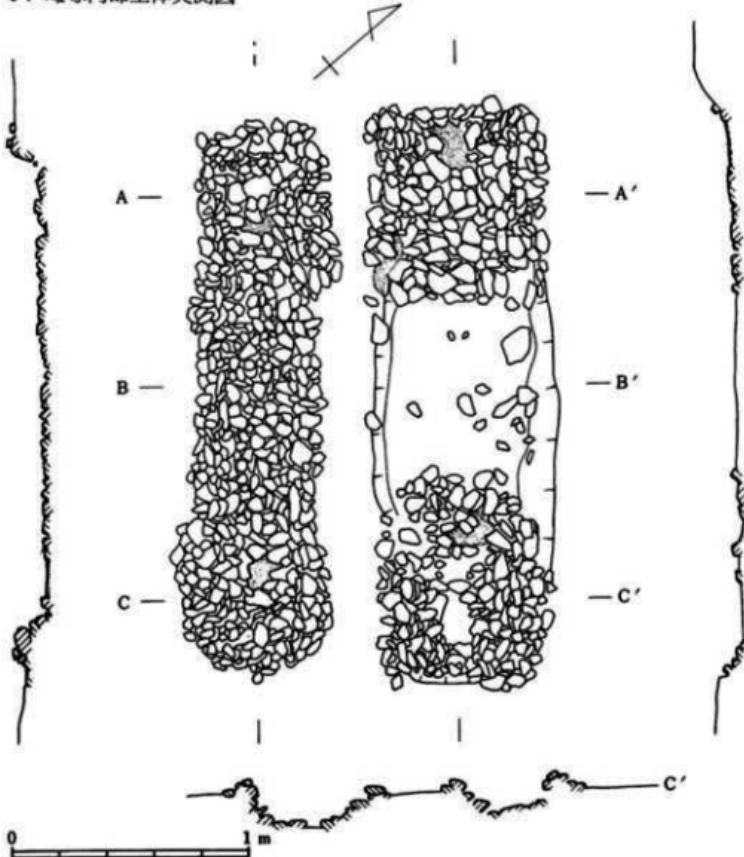
礫椁の長さは4.7~4.9mであって、長さと幅の比が3.3:1~6:1と著しく狭長である点は、この古墳の一つの特色である。このように狭長な構造の主体部を有するものは、長さ4.3m、最大幅88cmの佐賀市久保泉町熊本山出土の舟形石棺1例が本県内

では確認されているにすぎない。

この雑塚は盜掘されていたため、遺物はほとんど残存していなかったが、第1号から鉄剣1口、第2号から鉄刀1口がそれぞれ発見された。



4. 雜塚内部主体実測図



第1号出土の鉄劍は、長さ29cm、身幅4～3.1cm、厚さ0.7～0.5cmであって、先の方に次第に細くなるとともに厚さも減じ、身の断面は扁平な菱形を呈していて、ほぼ完構を保っているが、劍身が短かい点からみて槍ではないかとも考えられる。

第2号出土の鉄刀は、長さ56cm、身幅2.2cm余りである。

### 3. 方形周溝墓

方形周溝墓の存在が確認されたのは第3次の発掘調査であった。そして、第10次発掘調査においてこの調査を実施したのである。

栗崎山（標高55.9m）の南斜面は、ゆるやかなスロープを呈し、この南斜面に甕棺墓・石棺墓・古墳等の大半が築造されており、方形周溝墓もまたこの地区に存在していて、山頂から南西方向へ約40mの地点に位置している。

#### (1) 外部構造

##### ケ 封 土

第3次調査において方形周溝墓の存在が確認された時点では、すでに封土は存在していなかった。これが築造された時点での有無を確証づける何物もないが、調査の結果内部主体を発見することができなかったことからすると、本来は封土が存在しこの封土の部分に内部主体が營まれていたものと推察することができるが、その規模などについては不明である。

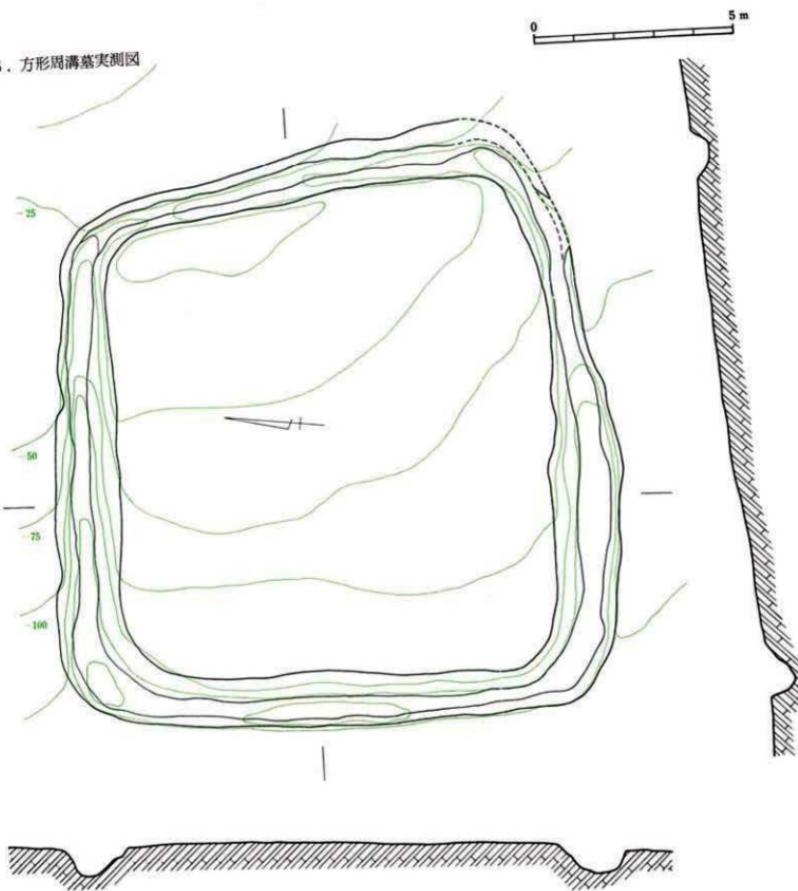
##### イ 周 溝

周溝の外縁から外縁まで南北14m・東西15m（最大幅）を測り、最大溝幅1.9m、深さ0.75cmの規模をもつ方形周溝である。しかし、調査が行われる以前に削平されているのでその原形を知ることはできない。

北溝と南溝は斜面に逆らうことなく穿たれているが、斜面の下方の溝の幅が広く上方に向うに従って狭くなりカーブ部で最少幅になり、溝の深さも浅くなる傾向をもつていて。最上部にある東溝は、南側をやや東に振って穿たれている。南東のカーブ部における溝の輪郭をはっきりさせることはできなかった。これは甕棺墓の土塗を切って構築されているためであった。西溝は最下部に位置し、ほぼ水平位に穿たれている唯一の溝である。この溝は、中央部で1.4m、西端で1.2mの幅をもつもので、中央部にやや広がりが見られる。また、溝の深さも中央部が深く両端が浅くなっている。この傾向は鳥栖市本川原遺跡注1・夜須町松尾古墳群注2などにも認められるものである。

この周溝の幅員や深さには多様性がみられるが、溝の断面構造には画一性がみられる。すなわち、方形台状部側の側壁は約45度の角度で削られて溝床に達し、床は丸底を呈して外側壁にいたる。この壁は60～70度の急角度で上昇して外縁にいたっている。溝の狭広・浅深にとらわれることなく周溝の断面構造はほぼ同様である。本川原遺跡・松尾古

5. 方形周溝墓実測図



墳群の方形周溝もこれであり、熊本県塚原古墳群<sup>注3</sup>や茨城県須和間遺跡<sup>注4</sup>などにおいても同様の傾向である。

### (2) 内部構造

方形台状部の表土層（約20cm）の下は鳥栖ローム層である。この方形台状部から内部主体と考えられる遺構を確認することはできなかった。このことから、削平された封土内に内部主体が構築されていたものと推定されるが、その内部主体がどのような形態をとっていたかは不明である。

### (3) 遺 物

方形周溝墓の南溝中央部に破損した壺形土器が出土したがこれが唯一の出土遺物である。

壺形土器は、胴径28cm程度であって丸底に近い形状であろうと考えられる。口辺部は不明である。胎土に砂粒を含み黄褐色を呈するもので焼成は良好である。器外面は窓による不規則な調整が施されている。この壺形土器は、末期弥生式土器と云うより古式土器として把握されるであろう。

注1 木下 巧「本川原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第26集

注2 「城山遺跡群」夜須町教育委員会

注3 熊本県教委が調査中であって、これまで18基が確認されている。

注4 茂木雅博「須和間遺跡」

## 4. 環状列石土塙墓

幅1m前後に花崗岩の礫を環状に並べ、そのほぼ中央に土塙墓が設けられている。礫は径20cm余りのものを中心に、最大のもので径50cm余りであって、環状列石の内径は3.5～2.9mである。

土塙墓は主軸を東北—西南の方向において設けられており、長さ1.94m、幅74～40cmで、西南の方から東北の方へ向かって次第に幅が狭まり、平面は隅丸長方形を呈している。深さは35cm前後であって、西南端に近く径40～35cm、深さ50cmの円形の浅い穴があり、東北端から40cmのところまでは高さ5cmの段となっている。この土塙墓は、地盤を掘り凹めただけのもので、他に施設や加工などは施されていないが、西北側のみは幅12cm前後の縁取りがなされている。

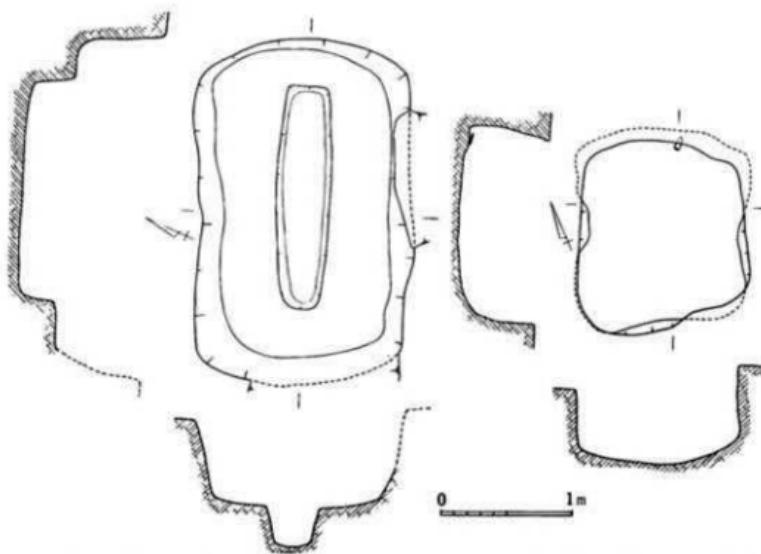
この環状列石土塙墓の封土については、その存在が明らかでなく、また、遺体や副葬品も発見されなかった。環状に列石がめぐらされた土塙墓は、県内においては他に類例をみない特色ある墓制の一つである。

## 5. 土塙墓

この姫方遺跡からは、環状列石土塙墓の他に7か所あまりの土塙墓が発見されている。



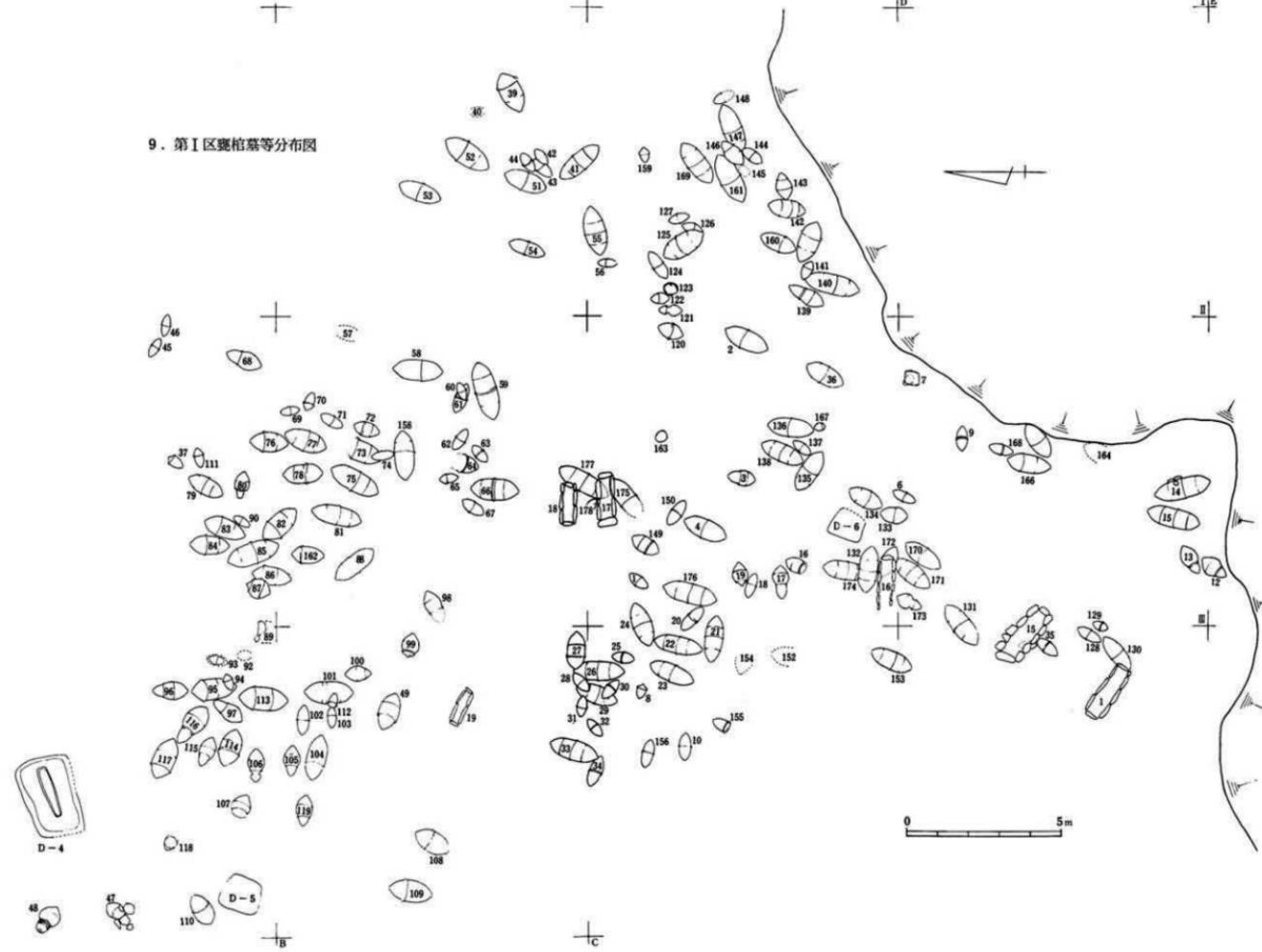
6. 環状列石土塚墓実測図



7. 第4号土塚墓実測図

8. 第5号土塚墓実測図

9. 第Ⅰ区襄柏幕等分布图



この土塙墓は、それぞれ構造や形式が異なっていて、特色を有している点が注目される。また、遺体は残存せず、副葬品としては磨製石剣1口が発見されているのみである。

#### (イ) 1号土塙墓

主軸をほぼ東西の方向において長さ146cm、最大部幅60cm、深さ25cm余りの土塙墓である。東側の幅が広くて、西側の方へ向かって次第に狭くなり、砲弾形の平面を呈している。土塙縁に5個の小塊石があり、土塙墓の東・南・西の3方向30~65cmのところは60~80cmの深い掘り込みとなっていて、土塙墓域が設定されたようになっている点が注目される。

#### (ロ) 2号土塙墓

主軸は南北に近い方向をとて設けられているが、僅かばかり南西一北東へふれてい。長さ1.3m、幅65~40cm、深さ35~20cmで、北側が幅・深さともに大で、南側の方へ向かって幅も深さも減じ、平面は隅丸長方形を呈している。3個の蓋石が設けられている石蓋土塙墓ではあるが、蓋石の間は隙が多く、粗雑な構成となっている。土塙の縁辺に3個の小塊石があって、蓋石の補強の役を果している。

#### (ハ) 3号土塙墓

主軸を東北一西南の方向にとって設けられていて、長さ116cm、幅52~40cm、深さ50cm余りの土塙墓である。東北の方の幅が広く、西南の方へ向かって少し狭くなり、平面は隅丸長方形を呈している。

#### (ニ) 4号土塙墓

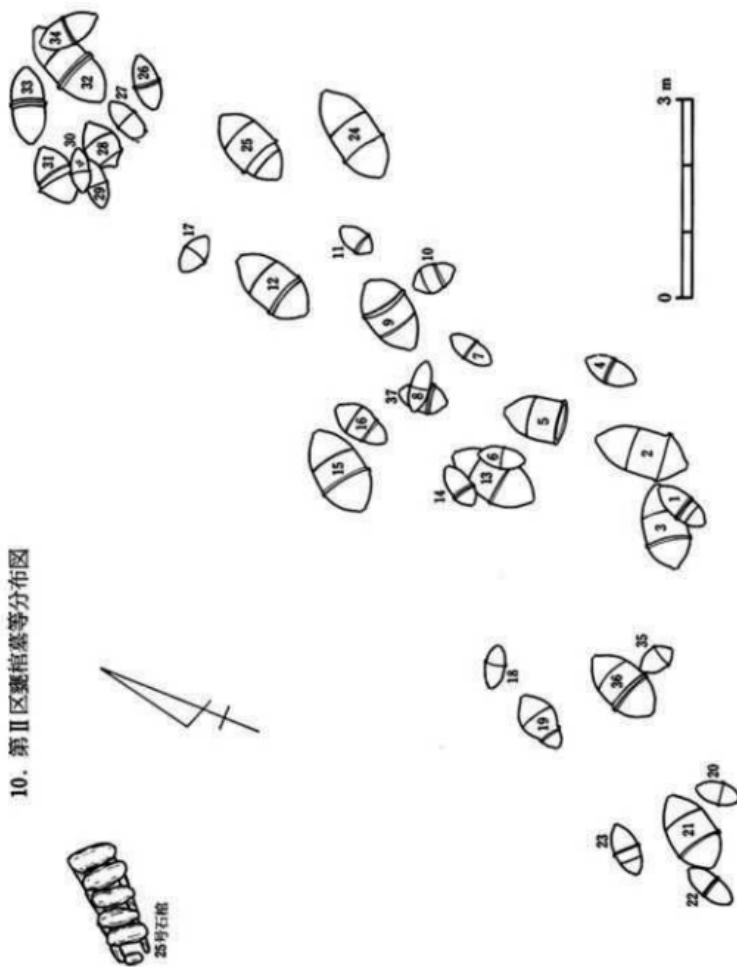
主軸をほぼ東西に近い方向をとった2段掘り込みの土塙墓である。外周の土塙は、東西2.6m、南北1.6m余りで、深さは65cm前後である。主体部は、この外周土塙のほぼ中央に、この外周土塙面をさらに1段掘り凹めて設けられている。主体部土塙は、長さ168m、最大幅40cmで、中央部がふくらみ、両端へ向かって狭まっているが、東端30cm・西端25cmで東側が僅かに広く、長楕円形に近い平面を呈している。深さは25cm前後であったと推定される。土塙の縁辺および底面には、粘土が張られているが、2段土塙で粘土縁取りの例は県内では、上峰村堤遺跡の土塙墓が知られているのみである。

#### (ホ) 5号土塙墓

南北1.45~1.05m、東西1.25~1.15mの不整方形を呈し、深さは60cm前後である。この土塙墓は、平面形が方形に近い形態を呈していること、底部が袋状になって上面よりもやや広くなっている点など、貯蔵穴に類似した構造である点が注目され、土塙墓であるかどうかは確定できない。

この土塙底部からは磨製石剣1口が出土している。剣先の部分のみを残し欠失していて、残存部分の長さ10.5cm、最大幅4m、厚さ1.2cmである。

10. 第Ⅱ区植物等分布图



中央に稜があるが、先端から4cmの所で、表裏ともに2稜となり、平坦面をつくっている。完全磨製であって、形態は優美である。本県内の土塙墓はもとより、石棺墓や甕棺墓等から磨製石剣が出土した例はなく、石器類が出土した例としては、唐津市葉山尻支石墓の土塙内から打製石鎌1個が出土しているのみである。

#### (iv) 6号土塙墓

東西1m、南北0.8mで、方形に近い平面形を呈し、深さは1m前後である。形態や深さなどからみて貯蔵穴に近く、果して土塙墓であるかどうか、甚だ疑問である。

### 6. 石棺墓

栗崎山山頂から南側斜面一帯に、甕棺墓や土塙墓と交錯しながら25個の石棺墓が存在する。これらの石棺墓は密集することなく分散していることが特徴であり、棺の構造にもいくつかの特色がみられる。

#### (1) 石棺墓の分類

第I類 花崗岩の塊石一面のつぶれた川原石を、縦に用いて棺をつくり、蓋石を用いて構築している。側壁は5・6箇で構成し、前後は1箇を用いている。石棺の長さは190cmを測る大形のもの、70cm程度の小形のもの、あるいは130cm前後の中形のものもある。

また、側壁と側壁との間隔は頭部で40cm前後、足部ではやや狭くなっている。床面はゆるやかな舟底状を呈し、敷石（粒状）が施されているものも存在する。

この形式に類する石棺墓の深さは25~30cmを測るもののが一般的であり、35cmを越えて深いものがないことがその特色である。

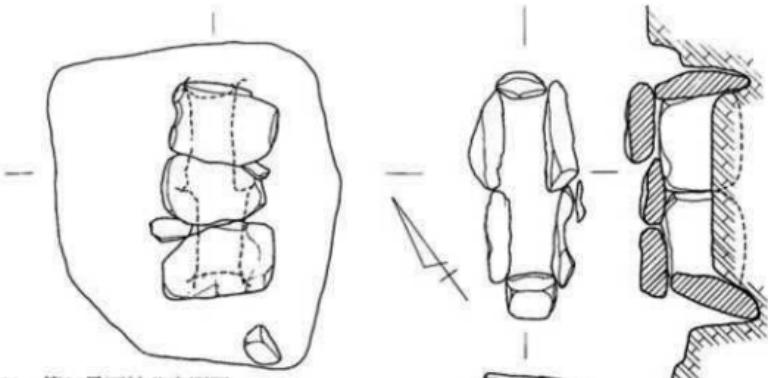
第II類 第I類石棺が塊石を縦に用いたことに対して、第II類石棺は同じ花崗石の川原石を用いているが、塊石を横に用いていることが特色であって、3種類に分類することができる。

第1形式 第I類石棺と同様規模の土塙を穿ち、その上縁に塊石を並べ蓋石を被せた形であって、その横断面はU字形を呈し3個存在する。

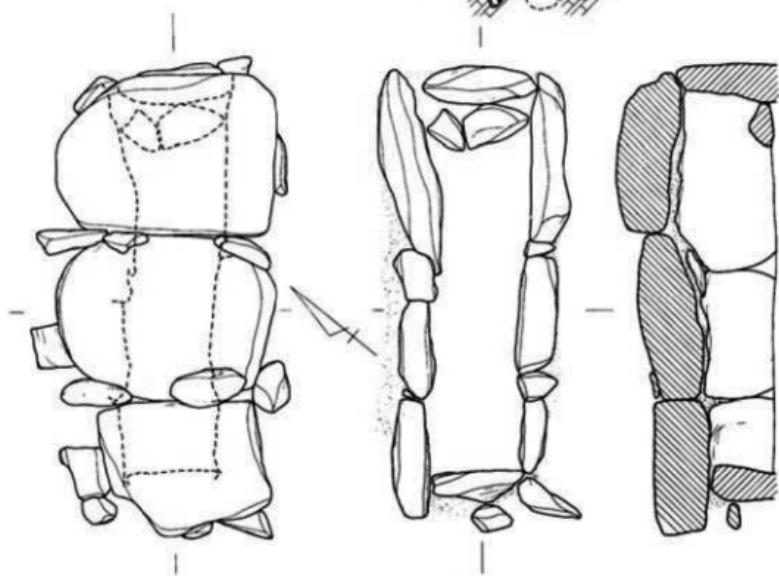
第2形式 第1形式の土塙側壁を塊石で2・3段に積み上げ竪穴式石室状を呈し、その上に蓋石を被う形態をとるもので2個存在する。

第3形式 第2形式の石棺を更に床部を深く掘り下げた形態をもつもので1個存在する。側壁の石積基部から15cm程度U字形に掘り下げたもので、石棺の深さが45cm程度である。

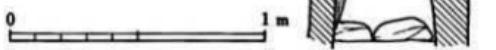
第III類 第I・II類が自然石の川原石を使用したのに対して、この第III類は石材を板状に加工して石棺を築いているもので3個存在する。

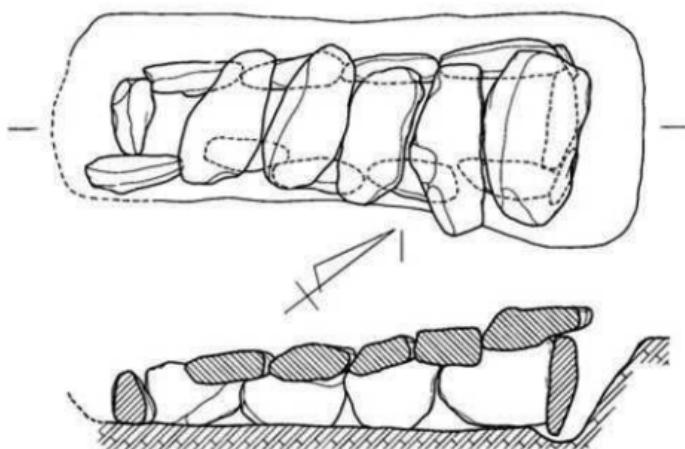


11. 第24号石棺墓実測図

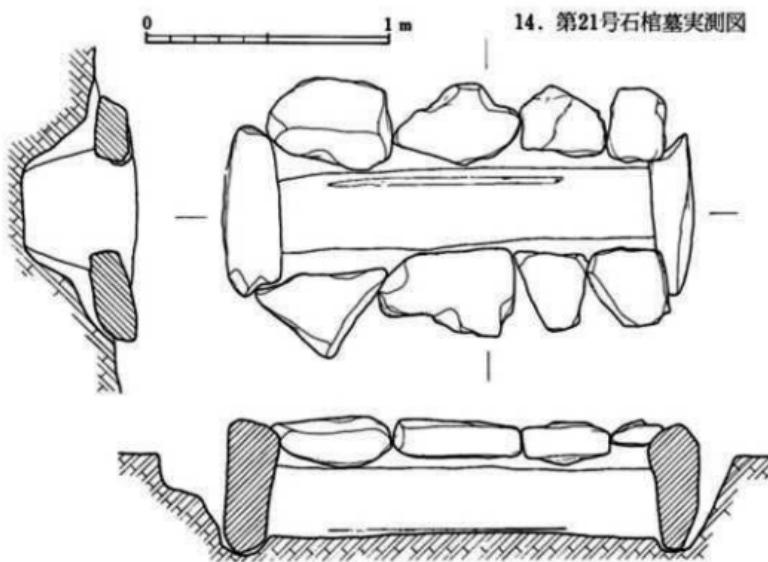


12. 第20号石棺墓実測図

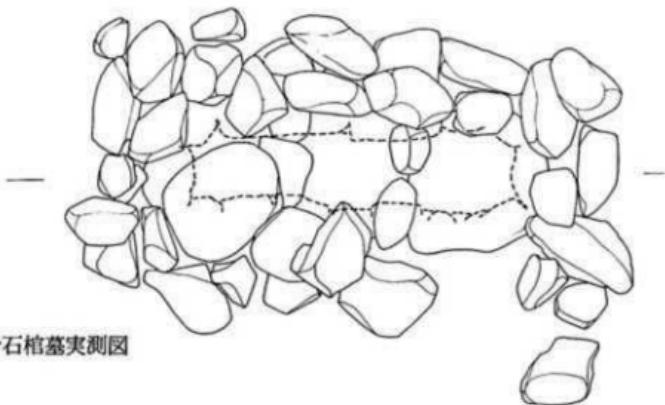




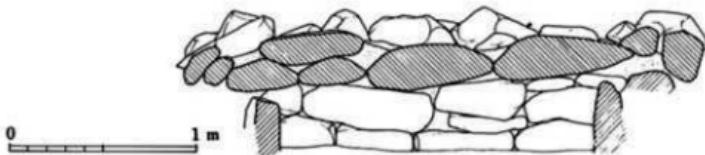
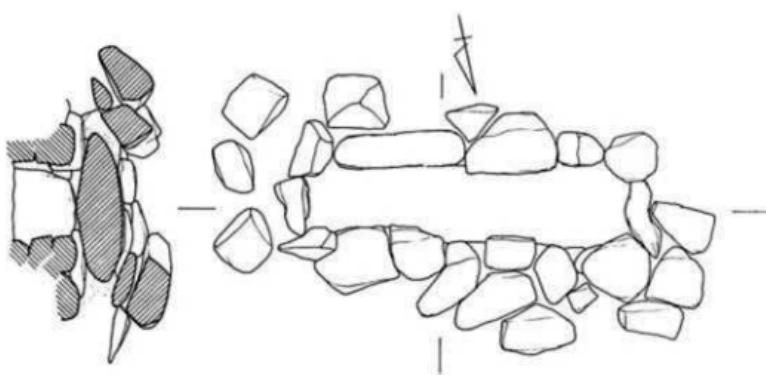
13. 第25号石棺墓实测图



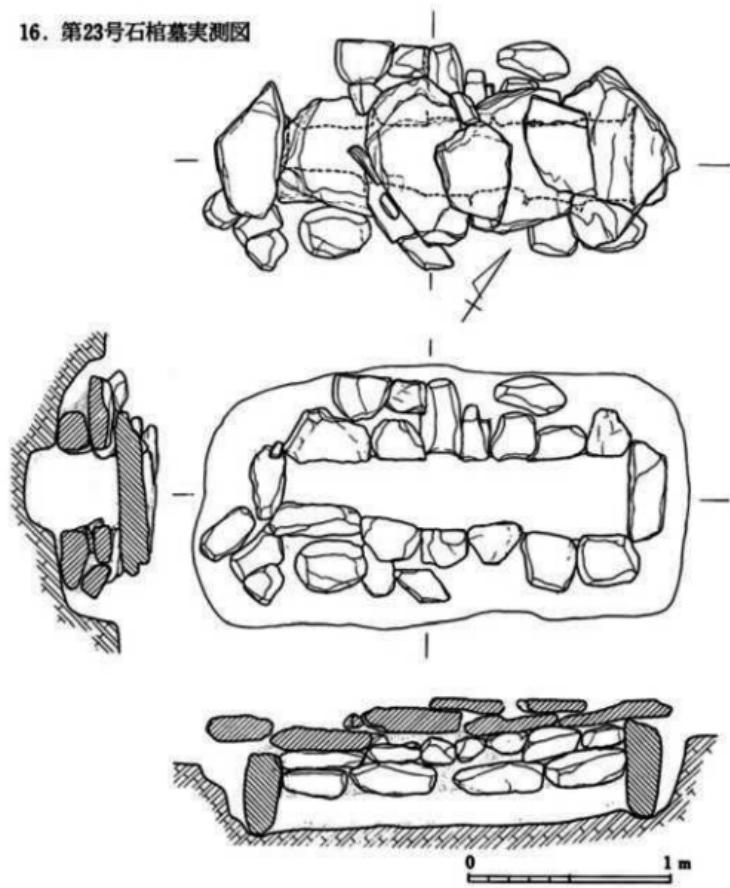
14. 第21号石棺墓实测图



15. 第12号石棺墓実測図



16. 第23号石棺墓実測図



## 7. 石棺墓

### (1) 墓域

栗崎山山頂を中心に東西約30m、南北約40mの区域内に約370組の石棺墓が集中して墓域を形成し、その南斜面の方形周溝墓の南側に隣接して東西約15m、南北約14mの区域内に37組の石棺墓が一群をなして墓域を構成している。また、これの南西40mの地点に存在する住居址に隣接して5組の石棺墓が、更に、その西南西約60mの丘陵末端部に2組の石棺墓が確認されている。

このように姫方遺跡においては、400組を越える大石棺墓群であるが、その中に在っ

でいくつかの墓域の区分がなされていることが確認されたのである。従って、栗崎山山頂附近を第Ⅰ区とし、方形周溝墓に南接する地区を第Ⅱ区とする。

## (2) 蔊棺墓等の種類

死体の埋葬に使用されている甕棺等の土器の種類や大きさにも多様性があって一様ではない。そこで、主体となる土器が甕形土器の場合は「甕棺墓」と呼称し、壺形土器を「壺棺墓」と称している。

また、主体となる土器の長径が80cm以上を測るものは「大型」・50cm以下は「小形」・その中間を「中形」と呼称する。さらに、土器と土器の接合方法については、ほぼ同形の口縁部を合せているものを「合口」・主体となる土器の口縁部をより大きい土器の口縁部が覆う形をとるものを「覆口」・逆に主体となる土器の口縁部に他方の土器の口縁部がすっぽり入ってしまう場合を「挿入」と呼び、「大形合口甕棺墓」のように呼称することにしたい。<sup>11)</sup>

また、主体となる土器に接合する土器には、甕・鉢・蓋形土器などがある。

### ① 大形の甕棺墓

第Ⅰ区の甕棺墓のうち、県教育委員会が調査した 171組を対象とする。大形の甕棺墓は、墓域の全城に分布しており約49%を占めている。このうち70%がほぼ同形の甕形土器と甕形土器の組合せになる合口甕棺墓である。大形の甕形土器を主体として鉢形土器を蓋とした合口甕鉢棺墓が26%である。また、甕形土器と甕形土器の組み合せで挿入甕棺墓の形態をとるもののが4%あって、この場合いずれかの口辺部を打ち欠いて上甕を挿入している。

大形の甕棺墓は、姫方Ⅰ式土器の時期が最とも多く57%を占め次いで姫方Ⅱ式土器の時期の35%、姫方Ⅲ式土器の時期は7%と急激に減少し、さらに姫方Ⅳ式土器の時期には2%弱に激減している。

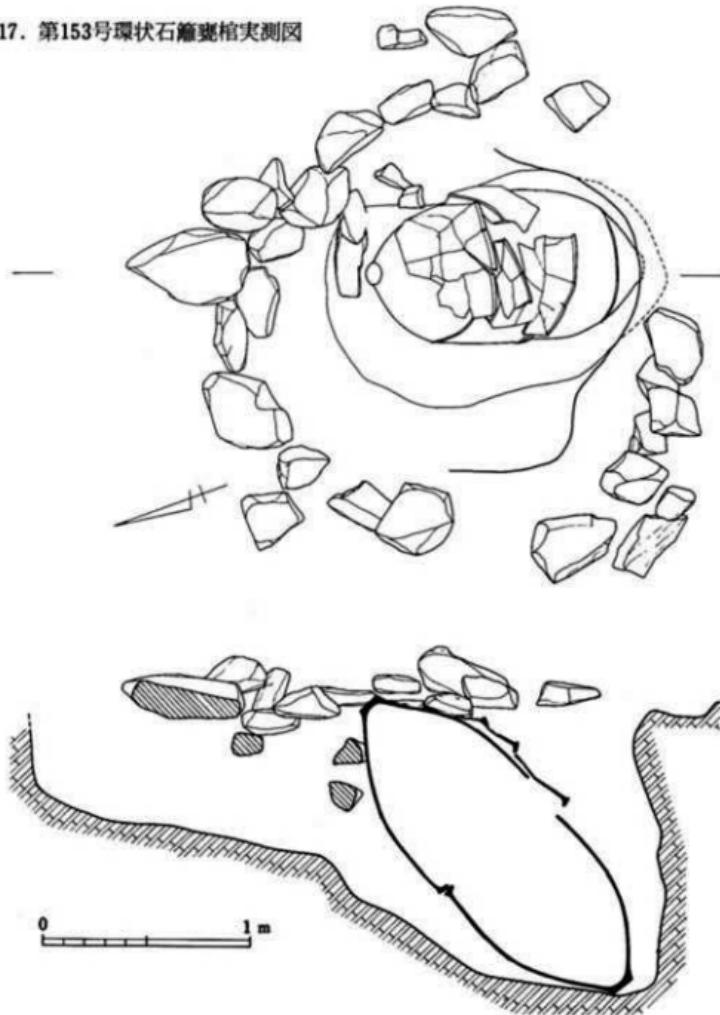
大形甕棺墓の埋葬様式は前述のように略同形の甕形土器と甕形土器とを接合した合口甕棺墓が主流をなしているが、時期によってそれに変化がみられる。すなわち、姫方Ⅰ式土器の時期は甕形土器と甕形土器の組み合せによる合口甕棺墓が92%を占める中で、鉢形土器と甕形土器の組み合せによる合口甕鉢棺墓は8%に過ぎない。これが姫方Ⅱ式土器の時期になると前者の組み合せが52%に減少し、後者の組み合せが48%——約半数にまで増加していることが注目される。

甕棺の埋置は、各時期をつうじそのほとんどが斜位であって水平位が皆無であることが特色であろう。また方位・粘土帶の有無についても特徴を見ることはできない。

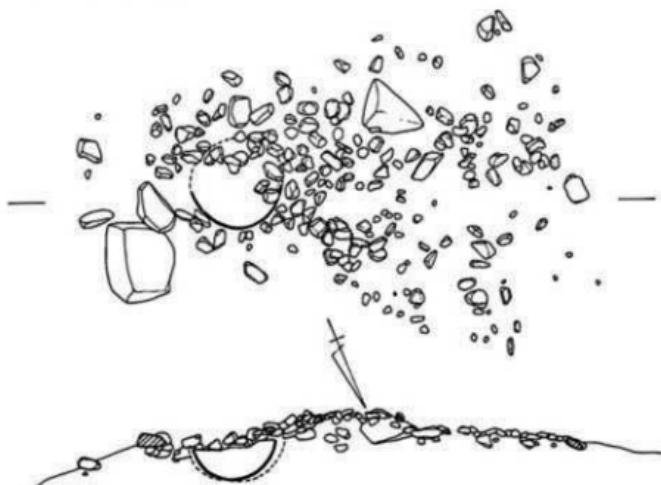
これらの甕棺墓のうち第 153号大形合口甕棺墓は特異な例として注目される。すなわち埋納する甕形土器の両者がいずれも口辺部を一部欠損したものを使っている。その

空間部には他の壺形土器の破片3個で覆い土砂の流入を防止する工夫を施している。また、壺棺を埋置した後で、この壺棺を中心に直径約2.7mの環状に礫石（直径20~50cm程度）を配置していることである。この環状石籬が本来的に地表には現われていないものと推察されるところから、基標としての意味を附加することは困難であるが、被埋葬者の墓域を表現する施設として理解されるであろう。なお、列石の内部やその周辺で焼

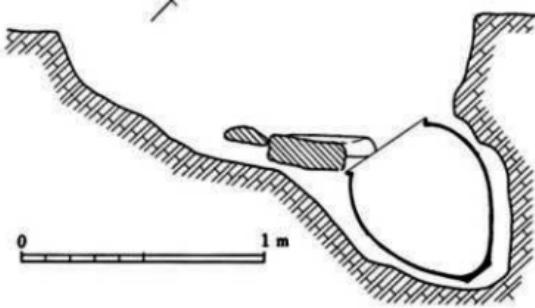
17. 第153号環状石籬壺棺実測図



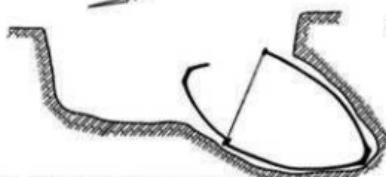
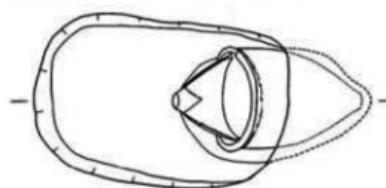
18. 第163号石積甕棺墓実測図 ①



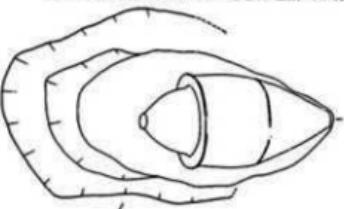
19. 第47号单甕棺墓実測図



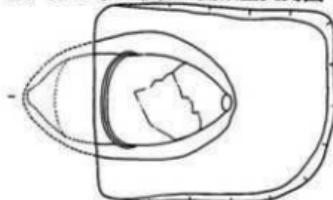
20. 第109号大形合口甕棺墓実測図



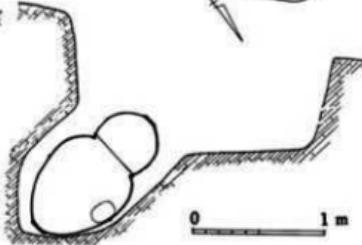
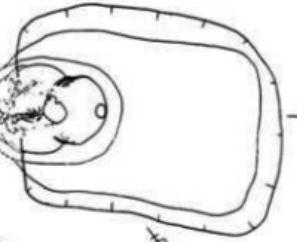
21. 第39号大形合口甕棺墓実測図



22. 第4号大形合口甕棺墓実測図



23. 第48号大形合口甕棺墓実測図



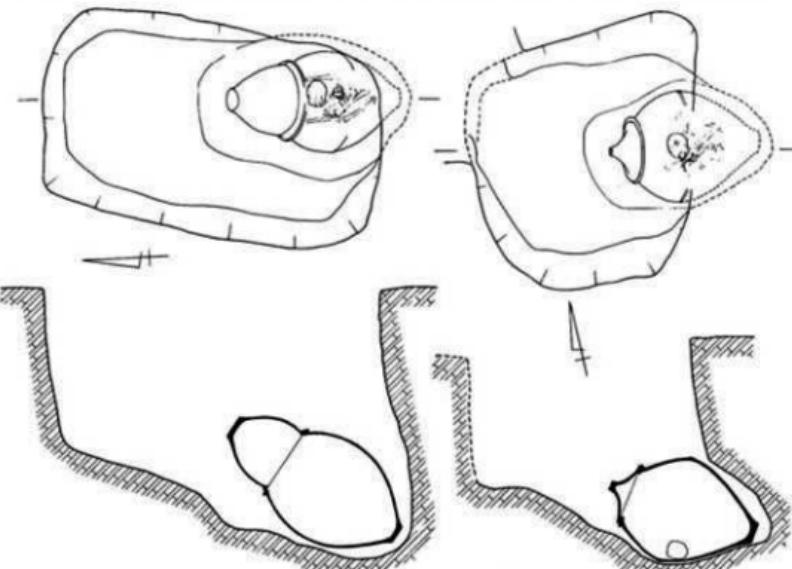
0 1 m

土・木炭・土器等は検出されていない。この特異な地域をもつ環状石籠甕棺墓は福岡県立岩遺跡にその類例をみることができる。

第2区の甕棺墓は37組があって、その33%が大形の甕棺墓である。このうち甕形土器と鉢形土器の組み合せの合口甕鉢棺墓が83%を占め、挿入甕棺墓と単棺墓がそれぞれ8%であって、甕形土器と鉢形土器の組み合せの合口甕鉢棺墓が主流をなしており、甕形土器と甕形土器の組み合せがないことは注目される。この第Ⅱ区では83%が姫方Ⅱ式土器の時期に集中している。

## ② 中形の甕棺墓

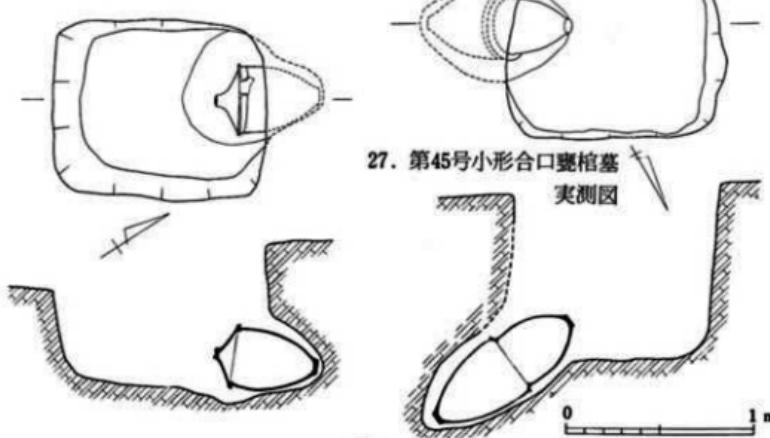
第I区では 171組の甕棺墓のうち19%が中形の甕棺墓である。これのすべてが合口甕棺墓であって、甕形土器と甕形土器の組み合せが55%を占め、鉢形土器と甕形土器の組み合せが33%、壺形土器と甕形土器・蓋形土器と甕形土器の組み合せが11%存在する。



24. 第3号中形合口甕棺墓実測図

25. 第99号中形合口甕棺墓実測図

26. 第37号小形合口甕棺墓実測図



この中形合口壺棺墓は、姫方Ⅱ式土器の時期に81%と集中しており、姫方Ⅰ・Ⅲ式土器の時期にそれぞれ7%・姫方Ⅳ式土器の時期に4%が営まれている。

第Ⅱ区では37組の壺棺墓のうち、17%（6組）が中形の壺棺墓に属し、すべてが姫方Ⅱ式土器に伴う合口壺棺墓の形態をとっている。このうち66%（4組）が鉢形土器と壺形土器の組み合せであり、壺形土器と壺形土器・蓋形土器と壺形土器の組み合せはそれぞれ16%（1組）である。

#### ③ 小形の壺棺墓

第Ⅰ区の171組の壺棺墓のうち31%が小形の壺棺墓である。小形の壺棺墓のうち「合口」の形態をとるもののが84%を占め、このうち壺形土器と壺形土器の組み合せが86%を占めて主流をなしている。大・中形壺棺墓が姫方Ⅰ式土器の時期には壺形土器と壺形土器の組み合せが主流をなし、同Ⅱ式土器の時期には鉢形土器と壺形土器の組み合せが盛行したことを述べたが、小形の場合は姫方Ⅰ・Ⅱ式土器の時期とともに壺形土器と壺形土器の組み合せが普遍的な壺棺葬としてとらえられると考えられる。

この他に、石蓋單壺棺墓1・單壺棺墓3がある。

また、第163号小形壺棺墓は、その上部が欠損しているが埋納時における打ち欠きと推察される。この壺形土器の上部に径30cm程度の魂石を東西に配し、その間を中心部に5～10cmの魂石が数段に積まれている。小魂石に乱れがみられるが、本来的には大魂石を数箇配置した内側に石積みがなされた石積壺棺墓と考えられるのである。

第Ⅱ区の37組のうち小形の壺棺は47%を占有し、すべてが合口壺棺墓であって姫方Ⅱ式土器の時期に集中している。組み合せは壺形土器と壺形土器が82%であり、鉢形土器と壺形土器が18%である。

#### ④ 壺棺墓

第Ⅰ区の壺棺墓に混じって4組存在する。ともに鉢形土器と壺形土器の組み合せであって、壺形土器の口辺部を打ち欠いて組み合せたものが2組ある。中形が1組あって姫方Ⅰ式土器の時期に、他の3組は小形であって姫方Ⅱ式土器の時期に比定することができるであろう。

### （3）壺棺の編年

姫方遺跡にみられる壺棺は4類に大分類することが可能であろう。しかし、同一類に包含された土器の中には、更に細分化する必要のある土器群もあるかと思われるが、あえて細分類を行わなかった。

#### ① 姫方Ⅰ式土器

第2号大形壺形土器に代表される形態をとるものである。胸部上辺に最大径をもち、胸部に1条ないし2条の山形凸帯をめぐらせており、口縁部は外側にわずかに内側に

はより張り出しがみられる。あざやかな褐色を呈しており焼成も良好である。胎土に小粒の砂を含んでいる。

この形式には佐賀市金立開拓遺跡の金立Ⅳ式土器・唐津市萬歳遺跡の萬歳式土器・福岡市金隈遺跡の金隈Ⅱ式土器に比定されるものであって、弥生時代中期前葉に編年することができるであろう。

また、小形の壺形土器は城ノ越式土器に包含さるものであろう。

#### ② 姫方Ⅱ式土器

第108号大形壺形土器に標示される。土器の最大径が口唇部に在って胴のふくらみが失われている。口縁断面はT字状を呈する。口縁直下に2条の山形凸帯・胴部にも2条の山形凸帯を施している。弥生時代中期中葉須玖式土器に比定されるであろう。

#### ③ 姫方Ⅲ式土器

第39号大形壺形土器に標示されるものである。底部から胴部まで直線的にふくらみをみせ、胴部に2条の山形凸帯を施し、そのやゝ上部から内側へすぼみながら口縁部にいたる器形を呈するものである。器体は赤褐色を呈し焼成良好であって、胎土に砂粒を含んでいる。

上峰村切通遺跡の切通Ⅱ式土器・福岡県立岩遺跡の立岩式土器併行と考えられるのであって、弥生時代中期後葉に比定されるであろう。

#### ④ 姫方Ⅳ式土器

第48号大形壺形土器に標示される。ふくらみを有する胴部、肩部から鋭く内凹して口縁部にいたり、1条の山形凸を付して外反する。口縁部の断面はくの字状を呈する。胴部には1条のコ状凸帯を施している。器体は褐色を呈し、Ⅲ式土器に比較すると焼成がやゝ不良であり、胎土に砂粒を含んでいる。刷毛で器体全面を調整している。

この土器群は唐津市桜馬場遺跡の桜馬場Ⅲ式土器・東脊振村三津永田遺跡の三津永田Ⅲ式土器併行と考えられるのであり、弥生時代後期前葉に比定されるであろう。

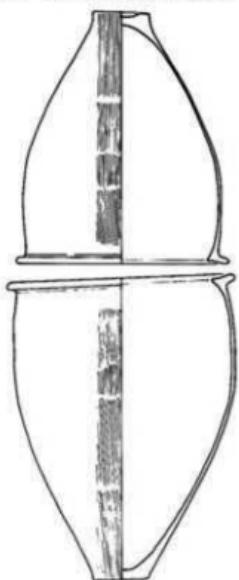
#### (4) むすび

姫方遺跡における甕棺墓域は大別して4群に分けることができよう。第Ⅰ群は栗崎山山頂附近、第Ⅱ群は方形周溝墓南側、第Ⅲ群は住居址周辺そして、第Ⅳ群は丘陵の西端に存在すると考えられる。

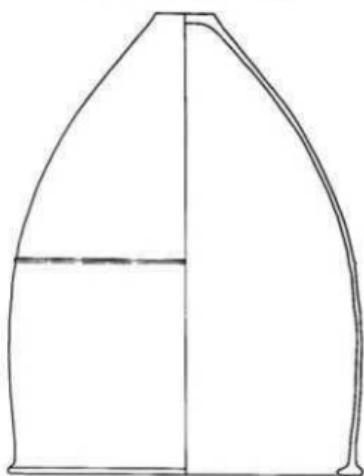
第Ⅰ群の墓域は広く且つ、数量的に多く350組を越えるものと推定される。この内の171組を対象とした場合に、姫方Ⅰ式期からⅣ期までの甕棺墓が存在するところから、弥生中期前葉から後期前葉まで甕棺葬が行われている。しかし、この甕棺葬はⅠ期が45%・Ⅱ期が46%と厚倒的に多く、Ⅲ期で6%・Ⅳ期では2%弱に激減しているところから、第Ⅰ群では姫方Ⅰ式土器の時期とⅡ式土器の時期を中心に墳墓が営まれている。

28. 姫方I式土器実測図

(1) 第42号小形合口甕棺

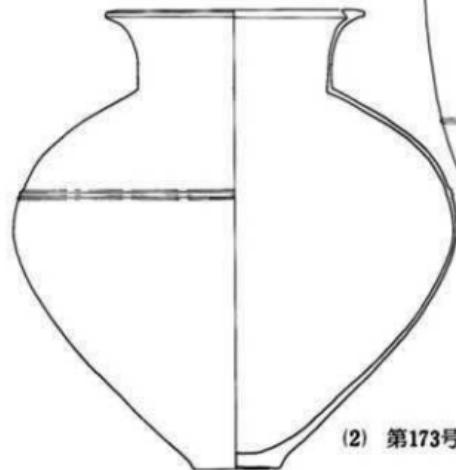


(3) 第2号大形合口甕棺



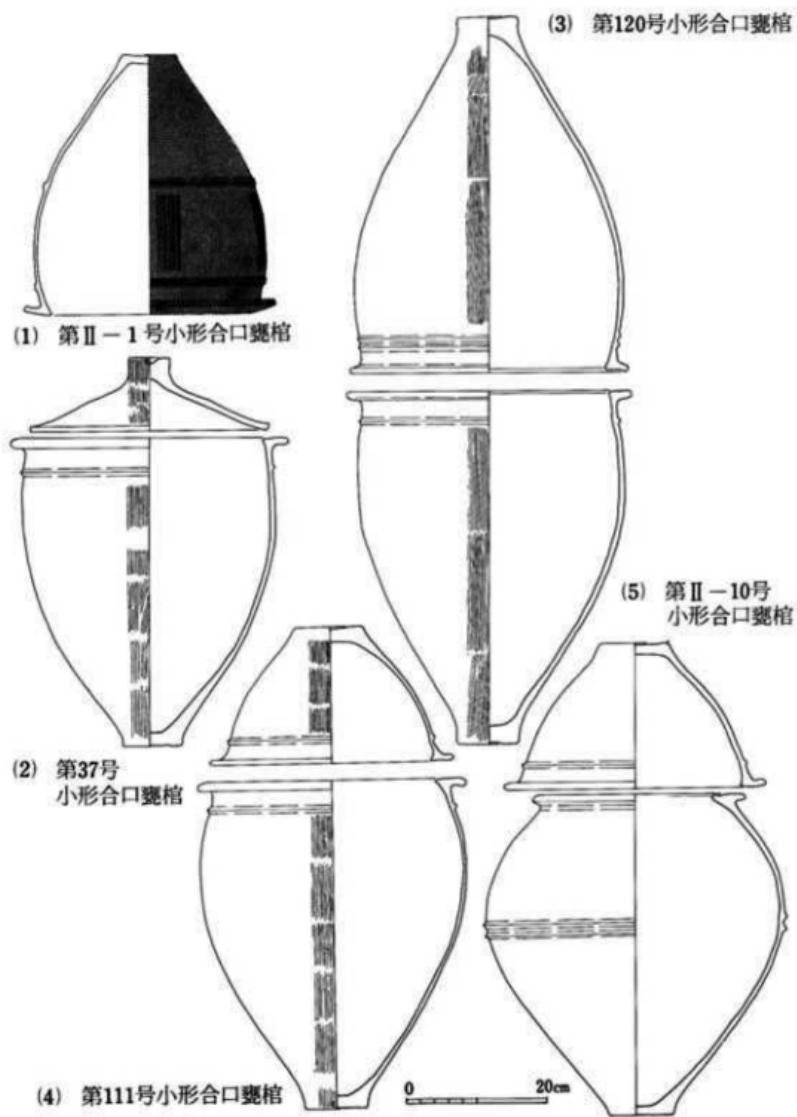
0 10cm

(2) 第173号壺棺



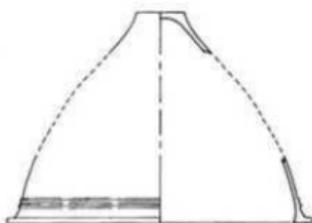
0 30cm

29. 姫方Ⅱ式土器実測図





(6) 第99号大形合口漆棺

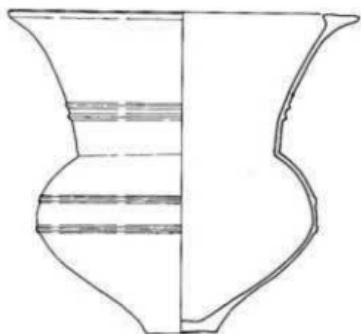


(7) 第3号大形合口漆棺

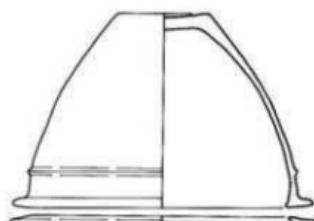


(8) 第108号大形合口漆棺

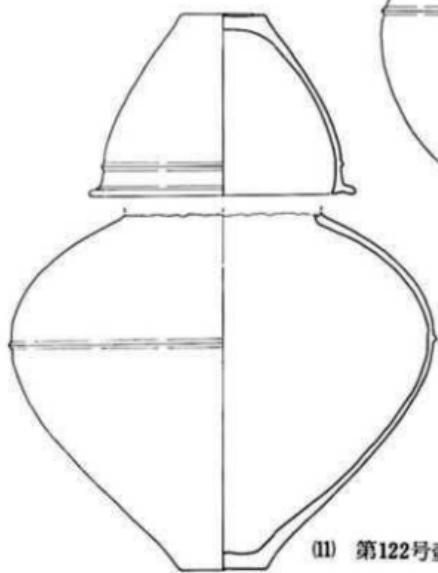
0 30cm



(9) 第106号大形合口壺棺（上）

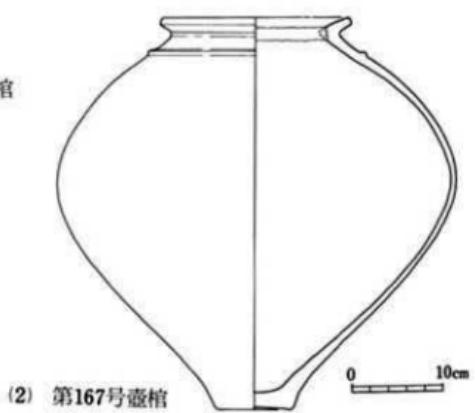
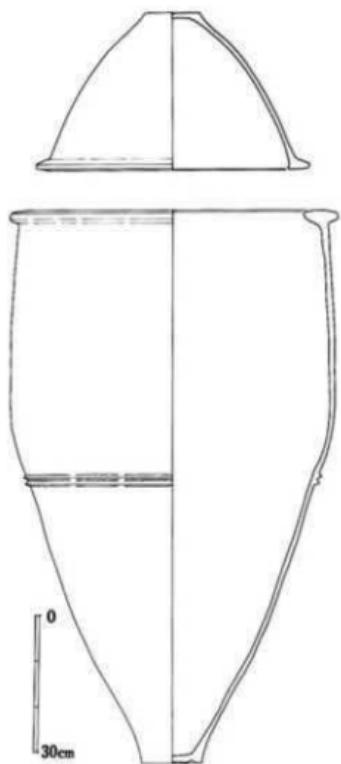


(10) 第121号壺棺

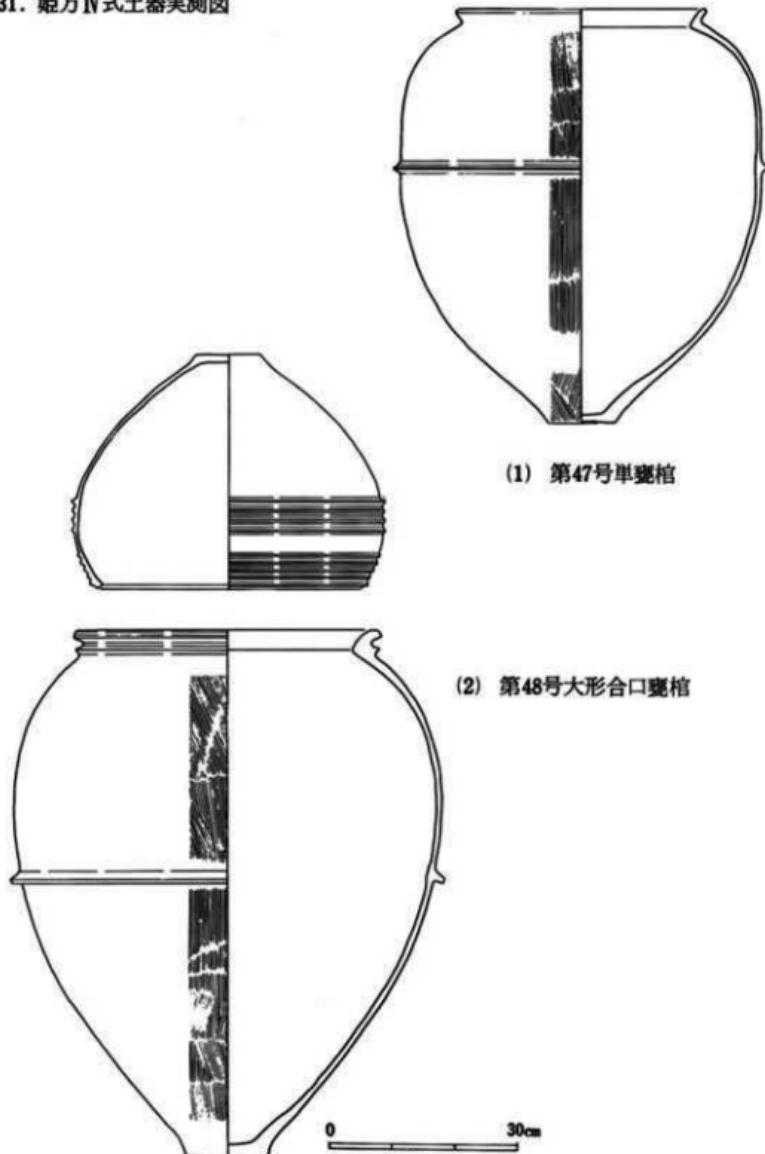


(11) 第122号壺棺

30. 姫方Ⅲ式土器実測図



31. 姫方IV式土器実測図



(1) 第47号单甕棺

(2) 第48号大形合口甕棺

第Ⅱ群では、94%が姫方Ⅱ式土器の時期に集中し、5%がⅠ式期に當まれており、Ⅲ期以降は廃絶していることが分る。第Ⅱ群の集団は第Ⅰ群の集団とは異った集団であり、中期前葉末にこの地方に住みついた農耕集団と推察される。

第Ⅲ・Ⅳ群はⅠ群やⅡ群の集団に属しなかった人々の家族墓であろう。

第Ⅰ群における環状石籠甕棺墓や積石甕棺墓、あるいは貝釧を内蔵した小形甕棺墓または、供獻用と考えられる土器を内蔵していた甕棺墓などがこの墓群の中でどのような思考のもとに當まれたものであろうか。この甕棺の大群墓地であるこの姫方遺跡からは、甕棺墓に伴のう副葬品は、僅か2例にすぎず、極めて貧弱である点も注目されるところであって、この墓地を形成した姫方弥生人の社会を反映しているものと考えられる。なお、貝釧は小形イモガイ2個で、径9cm×5cmで、小児用と推定される。

また、これらの集団における各家族の墓域の区割は? さらには彼らの住居と圃場の位置など今後検討すべき課題が多く残されているのではなかろうか。

最後に、姫方Ⅰ式土器の時期には成人が63%の死亡に対して、幼児童が37%である。これがⅡ式土器の時期では、成人の絶対数がⅠ期より約40%減少したのに對して、幼児童数は逆に約40%増を示している。成人が減少し幼児童が増加した反面、幼児童の死亡が64%に急激に増加しており、中でも児童の死亡率が高い。この急激な自然的事変・社会的事変に直面した姫方に墳墓を造営した人々はこの遺跡を廃絶させたものと推察される。

- (1) 木下巧「甕棺墓等の分類」 田代天満宮東方遺跡所収 佐賀県文化財調査報告書第24集
- (2) 森貞次郎「飯塚市立岩に於ける環状石籠甕棺墳」古代文化13の6
- (3) 木下巧「金立開拓遺跡」 佐賀市文化財調査報告書第10集
- (4) 木下巧「萬歳・寺ノ下遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第29集
- (5) 折尾学「金環遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集
- (6) 鏡山猛他「福岡県城ノ越遺跡」 日本農耕文化の生成所収
- (7) 金闇丈夫他「佐賀県切通遺跡」 日本農耕文化の生成所収
- (8) 杉原莊介他「佐賀県桜馬場遺跡」 日本農耕文化の生成所収
- (9) 金闇丈夫他「佐賀県三津永田遺跡」 日本農耕文化の生成所収

## 8. 住居址

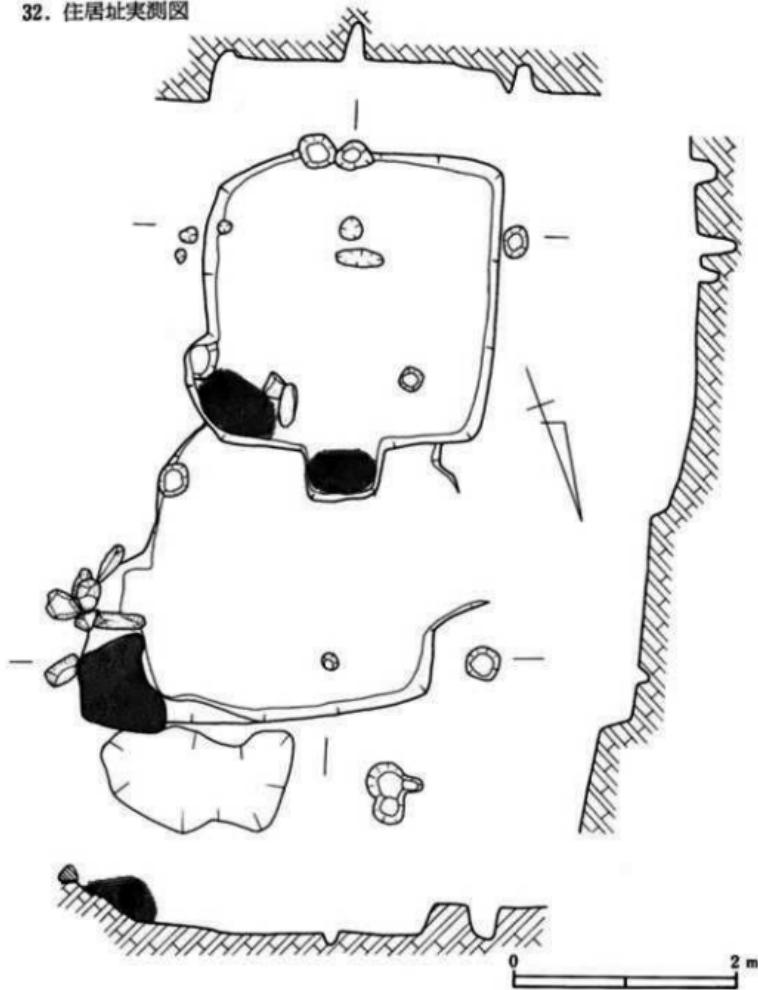
丘陵の南々西斜面で、傾斜がやゝ平坦な部分に位置する。この住居址は二戸が重複しているので、東側からA、B住居址と呼ぶ。

A、B住居址の新旧関係はA住居址の南側壁面および床面の一部を切り下げてB住居址が構築されている。從ってA住居址床面よりB住居址の床面は約50cm下がっている。A、B住居址はプラン上は大同小異であるので、A住居が何等かの理由で滅失したあと

時間的にあまり距らない時期にB住居が構築されたことが考えられる。

A住居の壁長は北壁で約4.3m、東壁で約4.5mを測り、西と南壁はB住居によって削り取られて長さは不明であるが、この住居のプランは1辺約4.5mの方形であったと考えることができる。残存壁高は北壁で約30cmである。柱穴は住居内に2箇所、外に2箇所が確認される。柱穴径は概ね30cm内外である。

32. 住居址実測図



東壁中央部分に幅約70cmで、奥行約30cmの突出した切り込みがあり、この部分には灰が薄く堆積し、床面部分が焼土となっていた。突出部の壁に接するように上部に自然石が不規則に積んでいた。一時的にここで火を用いた状況とは異なっており、ここにはくどが築かれていた可能性が強い。しかし、その構造について復原の手がかりとなるものは発見することができなかった。

B住居は表面をほど残しており、北壁で約4.0m、東壁で約3.7m、西壁で約4.0m、南壁で約4.0mを測る。この住居址は1辺約4mの竪穴住居址であって、柱穴は住居内に2箇所、壁面に4箇所、そして他に3箇所が確認された。柱穴径は最大約30cm、最小約20cmで深さは一定していない。柱穴底部には礎板あるいは敷石などは施されてはいない。

北壁中央部にはA住居址と同様の遺構、即ち、くどと推定される突出しがある。凸状に突き出た手前の幅は約110cm、最奥部で約85cm、奥行（突き出しの長さ）は約85cmである。開口部は床面と同じレベルであるが、奥部に向って漸高しつつA住居址の床面となる。従って、比高差は約40cmである。この凸状突き出し部分には灰が堆積し、床面は焼土となっていた。このことはA住居址の場合と同様、くどと考えられるが、くどを考えた場合、一応、支脚もしくは支石、あるいは天井覆いの遺構の存在が予想されるが今回の調査では確認することができなかった。

プランとくどの位置との関係をA・B住居址について考えた場合、その構築の位置はAにあっては東、Bにあっては北であることからして、風を配慮しての防火上の要素がその基本として考えることができよう。即ち、この遺跡の立地条件から、東方向からの風は全く考慮する必要はなく、年間を通じて西北西の季節風が卓越しており、或る時期に南西の、それのみに対処すればよいことに帰因すると思われる。このことは至近の遺跡に類例を求めるとき山田伊勢山遺跡がある。

この住居址からの出土遺物は土師器片のみである。須恵器の出土は一片も確認できなかった。土師器片からの時代編年は細片であったので求めることはできないが、須恵器を伴出しないことから思考して、この住居址の構築の年代は須恵器出現前とも仮定できよう

尚、住居址内流入土中には弥生式甕棺片、土師器片および須恵器片の混入があった。

## 9. その他の遺物

### (1) 旧石器時代の遺物

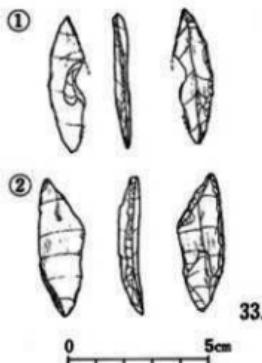
旧石器時代の遺物として後期旧石器時代に属するナイフ形石器が、方形周溝（基）南方より表面採集されている。

① 黒曜石の整った縦長剥片を素材としている。打面側を基部とし、背部と基部とに

主要剥離面側からのBluntingを端部に施している。刀部は新しく剥離を受け、原形を失っている。

② 厚味のある黒曜石の縦長剣片を素材とし、折断（技法）により石器の長さを定めている。①とは逆に打面側を先端部となし、背部及び基部とともに主要剥離面側からのBluntingを端部に施しているが、先端部の一部には逆からのBluntingも見られる。基部、先端部とも尖っているが、全体的にひし形に近い形態を示す。

佐賀平野周辺でのナイフ形石器の出土例は乏しいが、唐津周辺地域より出土する九州型ナイフ形石器と類似しており興味がもたれる。



33. 石 器



34. 縄文式土器片

## (2) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物として縄文時代中期阿高式土器1片が、同じく方形周溝（墓）南方より表面採集されている。全般的な器形は小破片のため推定不可能であるが、口縁は直口しており口唇部に指頭又は円い棒状の施文具によって鋸歯状の凹凸をつけ、口縁部にもまた同じような施文具によって連点文を施している。赤褐色を呈し、胎土中に滑石粉末の混入が見られる。

県内において同様の土器の出土例として坂の下縄文遺跡の第二類土器があげられる。

注1 坂の下縄文遺跡（佐賀県文化財調査報告書第19集）1971

## IV 総 括

佐賀平野の北に、東西の方向に聳えている背振山脈の南麓には、背振山脈から多くの舌状丘陵が派生して佐賀平野へ向かってのびている。この低丘陵の間には、狭小な低地が形成されていて、水田として開発され南へ向かって開けている。姫方遺跡は、これらの舌状低丘陵の中の一つに所在している遺跡であって、ブレイド・繩文式土器片・布目瓦片などの遺物、または住居址などの遺構も発見されてはいるが、遺跡の性格は弥生時代から古墳時代にかけての複合墓地群とみることができる。すなわち、400組以上の甕棺墓群、箱式石棺墓25個以上、土塙墓7か所以上の他に、破壊されたものを含めて3基の古墳、あるいは方形周溝墓や環状列石土塙墓などの墳墓群が発見されている。一遺跡内における墳墓様式の多様性、遺構の濃密さ、甕棺内弥生遺体の保存の良好さなど、墓制史上余り例をみない重要遺跡である。

しかるに、この遺跡の調査に当って、遺跡の性格やその遺構のひろがりなどに対する検討や認識が十分でなかったため、調査は終始一貫性を欠き弥縫的であったことを率直に認めざるをえないものである。

背振山脈南麓に分布する弥生甕棺墓の遺跡は、相当に濃密であって、この姫方遺跡の近くにあっても、西方1.5kmのところに中原町上地遺跡やドンドン落し遺跡、西方2.8kmに上峰村二軒茶屋丘陵遺跡、西方やや南寄り2.8kmに上峰村切通遺跡、西方約4kmに東背振村三津永田遺跡などが所在していて、100組以上の甕棺を包蔵していた遺跡が多いが、400組以上の甕棺を出土した遺跡は県内ではほとんどその例が知られていない。

弥生甕棺の遺跡は、背振山脈の南麓においては神埼町を境として東に濃密であって、佐賀市より以西は対称的に稀薄となる傾向が認められる。このことは弥生時代における農耕の立地条件と極めて密接な関係にあるのではないかと考えられ、姫方遺跡を中心とする一帯が弥生時代における先進的な農耕集落地帯であった一面をも反映しているのではないかろうか。また、県内における弥生甕棺墓は、中期の須歎式甕棺が主流をなしていく、前期と後期の両端へ向かって漸減する傾向が見られるのであるが、これは甕棺墓の盛行が弥生時代中期の時期であったことを物語るとともに、一面においてはこの中期の時期に安定した社会を現出していたことを暗示しているのではないかということが推定される。

姫方遺跡の甕棺墓も弥生時代中期を中心とするものであるが、その甕棺の大きさや形式など各種のものが含まれていて、甕棺の形式研究上注目すべきものがあり、また、甕棺墓の上面に墓標と推定される配石をおいたものがあり、甕棺の周囲に環状に配石したものなどもあって、甕棺の埋置様式上も注目される遺構を含んでおり、大小の甕棺數組

で1グループを構成しているのもあって、家族集団墓域の発生を推定させるなど、弥生甕棺墓研究上重要な意義を有する遺跡であるということができる。この遺跡の価値を高からしめたものの一つは、甕棺内の遺体であって、この遺跡からは保存の良好な遺体が相当多く出土している点もまた注目される。

甕棺の出土数に比較して、この遺跡から発見された副葬品は貧弱であり、具釧2個・鉄片1個などが出土しているにすぎない。この遺跡の西方には、内行花文明光鏡・双禽鏡・流雲文獸帶鏡・銅鏡・素環頭太刀・鉄劍・鉄釧・玉類・具釧などの豊富な副葬品を出土した東背振村三津永田遺跡、方格規矩鏡・素環頭太刀・鉄劍などを出土した東背振村横田遺跡、銅劍や貝釧を出土した上峰村切通遺跡などが分布している。この副葬品からみる限り、弥生時代における当地方の社会的中心地は、この遺跡の西方4kmのところを南流する田手川の上流の流域一帯にあったのではないかと推定される。

弥生甕棺群の他に、箱式石棺墓と土塙墓とが発見されている。土塙墓内に磨製石剣を副葬したものもある、土塙墓の中には弥生時代に属するものも存在するが、土塙墓のすべてが弥生時代の营造かどうかは明らかでない。甕棺は一般に地盤を深く掘り込んで埋蔵されているのに対し、箱式石棺は一般に比較的に表土に近く浅い地点に營まれている点が注目され、石棺内に鉄劍や鐵刀が副葬されていたものもあり、また、石棺の形式などからみて、石棺の大半は古墳時代に營造されたものではないかと推定される。

この遺跡には3基の古墳がかつて存在していたことが判明しているが、他にも築造されていたことが遺物の分布や地形上などから推定され、築成されていた古墳の数を正確に知ることはできない。古墳の中の雌塚は、疊柳墓という県内では他に例を見ない特殊な構造であり、その主体部が狭長であって、畿内の前期古墳の内部主体に相通する点があるのが注目される。この雌塚は、県内の古墳としては最も古い形式を有する古墳の一つであって、その築成年代は五世紀初頭前後を降るものではなかろうと推定される。雄塚は破壊の度がひどく内部主体の構造は明らかでない面も多いが、副室や副葬品埋納施設を有している点や、内行花文鏡の副葬品などからみて、やはりその築成年代は五世紀前半頃のものではなかろうかと考えられる。

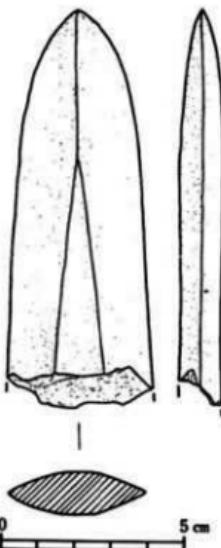
この遺跡の遺構として注目されるものに、環状列石土塙墓と方形周溝墓がある。方形周溝墓は、県内では鳥栖市本川原遺跡に2か所、上峰村堤遺跡に1か所、中原町姫方原遺跡に1か所、この姫方遺跡の1か所を含めて5か所の存在が知られている。県内の方形周溝墓は、古墳時代の前期ごろの造営であろうと推定されているが、この姫方遺跡の周溝墓も周溝内から出土している1個体分の土師器からみて、同一時期の营造になるものであろうと推定される。環状列石土塙墓は、県内では他に例がなく、また副葬品等の遺物も発見されていないため、その築成年代を明らかにすることができない。しかし、

方形周溝墓と同じく一定の墓域を平面的に占有している点が注目されるのであって、古墳発生の前段階的な要素を有しているとみることが可能であろうと考えられ、その营造年代は古墳時代の前期ごろに比定されるのではなかろうか。

姫方遺跡は、弥生時代の墳墓として甕棺群や土塙墓があり、古墳発生期の墳墓としての方形周溝墓や環状列石土塙墓が営まれ、古墳時代に入ると円墳や石棺墓が造営されている墓制研究上重要な位置をしめる遺跡である。従って今後検討すべき多くの課題を有していることが考えられ、この報告書においては、概観的な所見のみにとどめておくことにしたい。



34. 雄塚出土の内行花文鏡



35. 第5号土塙墓出土石剣

姫方遺跡甕棺墓一覧表

番号	種類 上蓋下蓋	方 向	傾 斜	方法	粘土帶	大 き さ	凸 帯		土器形式	備 考
							上 蓋	下 蓋		
1	甕 甕	N-W145°	27°	合口	有	小兒			I	
2	甕 甕	N-W160°	40°	合口	有	成人	胴一条	胴一条	I	
3	鉢 甕	N-E 2°	37°	合口	有	子供	口下一条	胴二条	II	貝銅2
4	甕 甕	N-W157°	35°	合口	有	成人	胴一条	胴一条	I	
5										欠 番
6	甕 甕	N-E 21°	26°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条		
7	甕				石蓋	無	小兒	—		石蓋甕棺
8	蓋 甕	N-E 106°	35°	合口	有	小兒	—	—	I	
9	甕 甕	N-W 87°	35°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	II	
10	甕 甕	N-W 92°	28°	合口		小兒				
11										欠 番
12	鉢 甕	N-W 146°	18°	合口	有	子供	口下一条	胴一条		
13	甕 甕	N-W 125°	-8°	合口	有	子供				
14	甕 甕	N-E 168°	2°	合口	無	成人	胴一条	胴一条	I	甕棺の横側を石で覆う。
15	甕 甕	N-W 172°	28°	合口	有	成人	口下二条 胴二条	胴二条	I	
16	— 甕	N-W 168°	約35°	單	無	子供	—	胴二条	II	單棺單棺
17	甕 甕	N-W 95°	29°	合口	有	子供	—	胴二条	II	
18	甕 甕	N-W 72°	2°	合口	無	小兒	—	—	II	
19	蓋 甕	N-W 99°	47°	合口	有	子供	—	胴二条	II	
20	甕 甕	N-E 137°	29°	合口	有	小兒	口下二条	口下二条	I	
21	甕 甕	N-W 76°	42°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	II	
22	甕 甕	N-W 169°	35°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
23	甕 甕	N-W 153°	34°	合口	有	成人	胴一条	胴二条	II	
24	甕 甕	N-W 111°	32°	合口	有	成人	胴二条		I	
25	甕 甕	N-W 177°	41°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	I	
26	甕 甕	N-E 176°	29°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
27	鉢 甕	N-W 88°	19°	合口	有	成人	口下一条	胴二条	I	
28	甕 甕	N-W 137°	31°	合口	有	小兒			II	
29	甕 甕	N-E 19°	27°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
30	甕 甕	N-W 46°	31°	合口	有	小兒	口下二条		II	
31	甕 甕	N-E 71°	約31°	合口	有	小兒	—	—		
32	甕 甕	N-W 127°	26°	合口	有	小兒		口下一条	II	
33	甕 甕	N-W 169°	31°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
34	甕 甕	N-W 67°	21°	合口	無	子供	—	口下二条	II	上蓋の口縁を打ち欠く。
35	甕 甕	N-W 131°	23°	合口	有	小兒	口下一条	口下二条	II	
36	甕 甕	N-E 29°	47°	合口	有	成人	胴一条	胴一条	I	
37	蓋 甕	N-E 34°	7°	合口	有	小兒	—	口下一条	II	
38										欠 番
39	鉢 甕	N-E 64°	29°	合口	有	成人	—	胴二条	III	

番号	種類 上要下要	方 向	傾 斜	方法	粘土帶	大きさ	凸 带		土壤形式	備 考
							上 要	下 要		
40						小兒				破壊
41	要 要	N-E 142°	29°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
42	要 要	N-E 51°	32°	合口	有	小兒	—	—	I	
43	鉢 要	N-E 45°	約33°	合口	有	小兒	口下二条	口下二条	I	
44	要 要	N-E 57°	36°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条		
45	要 要	N-W 58°	36°	合口	有	小兒	—	口下一条	II	
46	要 要	N-E 115°	22°	合口	有	小兒				
47	一 要	N-W 132°	52°	单	無	子供	—	胴一条	IV	
48	鉢 要	N-W 52°	45°	合口	有	成人	口・胴九条	口下一条 胴一条	IV	
49	要 要	N-W 68°	25°	挿入	有	成人	胴二条	胴二条	II	上要の口縁を打ち欠く。
50										欠番
51	要 要	N-E 20°	42°	合口	有	成人	胴一条	胴一条	I	
52	要 要	N-E 36°	15°		無	成人	胴二条	胴二条	III	上腹脚部から打ち欠く。
53	要 要	N-W 163°	35°	合口	有	成人	胴一条	胴一条	I	
54	要 要	N-E 24°	1°	合口	有	子供	口下一条	口下二条	I	
55	要 要	N-E 74°	28°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
56	要 要	N-E 179°	46°	合口	有	小兒	—	—	I	
57		要								破壊
58	要 要	N-W 175°				成人			I	
59	要 要	N-E 78°	26°	合口	有	成人	口下二条 胴二条	口下二条 胴二条	II	
60	要 要	N-E 73°	38°	合口	有	小兒	—	—	II	
61	要 要	N-E 106°	6°	合口	有	子供	口下一条	口下二条		
62	要 要	N-E 127°	36°	合口	有	子供	口下一条	口下一条	II	
63	要 要	N-W 134°	35°	合口	有	小兒	口下一条	口下二条	I	
64	要 要	N-E 19°	52°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
65	鉢 要	N-W 10°	26°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	I	
66	要 要	N-W 178°	39°	合口	有	成人	口下二条 胴二条	口下二条 胴二条	II	
67	要 要	N-E 33°	34°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	I	
68	要 要	N-E 22°	6°	合口	有	子供	口下一条	胴一条	II	
69	要 要	N-W 6°	39°	合口		小兒				
70	鉢 要	N-W 68°	7°	合口		小兒	口下一条	口下一条	I	
71	要 要	N-E 39°	41°	合口		子供	口下一条	胴二条	II	
72	鉢 要	N-E 15°	28°	合口		子供	口下一条	口下二条 胴二条	II	
73	鉢 要	N-E 21°	23°	合口	有	成人	—	口下二条 胴二条	II	
74	要 要	N-W 27°	8°	合口		小兒			I	
75	要 要	N-E 21°	33°	合口	有	成人	胴一条	胴一条	I	
76	鉢 要	N-W 1°	34°	合口	有	成人	口下二条	胴二条	II	
77	要 要	N-E 14°	48°		有	成人	胴二条	胴二条	II	上要の口縁を打ち欠く。
78	鉢 要	N-E 178°	33°	合口	有	成人	口下二条 胴二条	口下二条 胴二条	II	

番号	種類 上要下要	方 向	傾 斜	方 法	粘土帶	大 き さ	凸 带		土 質 形 式	備 考
							上 要	下 要		
79	要	N-W125°	26°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	II	
80	鉢 要	N-W82°	13°	合口	有	子供	口下二条 胴二条	胴二条	II	
81	要	N-E13°	28°	合口	有	成人	胴二条	胴一条	I	
82	鉢 要	N-W43°	23°	合口	有	成人	口下一条	胴二条	II	
83	鉢 要	N-E25°	26°	合口	有	成人	—	胴二条	II	
84	鉢 要	N-W2°	32°	合口	有	成人	口下一条	胴二条	II	
85	要	N-W27°	21°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	II	
86	鉢 要	N-E7°	-1.5°	合口	有	成人	口下二条	胴二条	I	
87	蓋 要	N-E24°	4°	合口	有	子供	—	胴二条	III	
88	要	N-W38°	34°	合口	有	成人	胴一条	胴一条	I	
89	要					成人				破壊
90	要	N-E31°	32°	合口	有	小兒	—	—	I	
91										欠番
92	要					小兒				破壊
92	要					小兒	胴二条		II	破壊
94	鉢 要	N-E72°	25°	合口	有	小兒	胴一条		II	
95	鉢 要	N-W7°	28°	合口	有	成人		胴二条	II	
96	要	N-E1°	1°	合口	有	子供	—	胴二条	II	
97	要	N-E38°	13°	合口	有	子供	口下一条	口下二条 胴二条	II	
98	鉢 要	N-W111°	8°	合口	有	子供		胴二条	II	
99	蓋 要	N-W77°	23°	合口	有	子供	—	胴二条		
100	鉢 要	N-E187°	15°	合口	有	子供	口下一条	胴二条	II	
101	要	N-E2°	24°		有	成人	胴二条	胴二条	I	上要の口縁を打ち欠く。
102	要	N-W95°	5°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	I	
103	要	N-W88°	3°	合口	有	小兒	—	—	II	
104	鉢 要	N-W77°	31°	合口	有	成人			II	
105	要	N-W85°	33°	合口	有	子供	—	胴二条	II	
106	蓋 要	N-W92°	ほぼ水平	合口	有	子供	くび三条 胴二条	胴二条	II	
107	一 要	N-W58°	約40°	單	無	子供	—	口下一条 胴二条	III	
108	鉢 要	N-E32°	35°	合口	有	成人	口下二条	口下二条 胴二条	II	
109	鉢 要	N-E14°	約25°	合口	有	成人	—	口下二条	II	
110	要	N-E59°	40°	挿入	有	成人	胴一条	口下一条 胴二条	III	上要の口縁を打ち欠く。
111	鉢 要	N-E81°	33°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	II	
112	一 要	N-W約80°	40°	單	無	小兒	—	—	II	
112	鉢 要	N-W6°	34°	合口	有	成人	口下一条	口下二条 胴二条	II	
114	鉢 要	N-W74°	31°	合口	有	成人	—	口下二条 胴二条	III	
115	要	N-W67°	25°	合口	有	子供	—	胴二条	II	
116	要	N-W48°	14°	合口	有	成人	口下二条	口下一条 胴二条	II	
117	鉢 要	N-W64°	27°	合口	有	成人	口下一条	胴二条	II	

番号	種類 上要下要	方 向	傾 斜	方 法	粘土帶	大 き さ	凸 带		土壁形式	備 考
							上 要	下 要		
118	要 要	N-E 120°	約50°	合口	有	小兒	—	—	III	
119	鉢 要	N-W 86°	19°	合口	有	子供	口下一条	口下二条 胸二条	II	
120	要 要	N-E 27°	44°	合口	有	小兒	口下二条	口下一条	II	
121	鉢 盆	N-W 1°	22°	合口	有	小兒	口下一条	胸一条	II	
122	鉢 盆	N-W 11°	約30°	挿入	有	小兒	口下一条	胸一条	II	下盃の口縁を打ち欠く。
123	鉢 盆	N-E 96°	62°	挿入	有	小兒	口下二条	胸一条	II	下盃の口縁を打ち欠く。
124	要 要	N-E 57°	13°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	I	
125	要 要	N-E 140°	44°	合口	有	成人	胸二条	胸二条	I	
126	要 要	N-E 24°	39°	合口	有	小兒	—	—	I	
127	要 要	N-E 107°	27°	合口	有	小兒	—	—	II	
128	要 要	N-E 27°	3°	合口	有	小兒	胸一条	口下一条		
129	鉢 要	N-W 162°	37°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	I	
130	要 要	N-E 49°	29°	合口	有	成人	胸一条	胸一条	I	
131	要 要	N-W 129°	29°	挿入	有	成人	胸二条	胸二条	I	上盃の口縁を打ち欠く。
132	要 要	N-E 98°	38°	合口	有	成人	胸二条	胸二条	I	
133	要 要	N-W 167°	44°	挿入	有	成人	胸一条		I	上盃の口縁を打ち欠く。
134	要 要	N-E 22°	50°	合口	有	成人	胸二条	胸一条	I	
136	要 要	N-E 133°	34°	合口	有	成人		胸二条	II	
136	要 要	N-E 174°	38°	合口	有	成人			I	
137	要 要	N-W 155°	約32°			小兒				
138	要 要	N-W 161°	37°	合口	有	成人	胸二条	胸二条	I	
139	要 要	N-E 31°	5°	合口	有	子供	口下二条	胸二条	II	
140	要 要	N-E 16°	21°	合口	有	成人	胸一条	胸二条	I	
141	鉢 要	N-E 114°	38°	合口	有	小兒	—	口下一条	II	
142	要 要	N-E 14°	49°	合口	有	成人	胸二条	胸二条	I	
143	鉢 要	N-E 81°	17°	合口	有	子供	口下一条	胸二条	II	
144	要 —	N-W 144°	34°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条		
145	— —	— —	— —	— —	—	—	—	—	破 壊	
146	鉢 要	N-E 52°	2°	合口	有	子供	口下一条	胸二条	II	
147	要 要	N-E 70°	26°	合口	有	成人	胸二条	胸二条	I	
148	要 要	N-E 155°	38°	合口	無	小兒	—		I	上盃破壊
149	鉢 要	N-W 149°	約36°	挿入	有	子供	口下二条	胸二条	II	
150	要 要	N-W 53°	26°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	I	
151	蓋 要	N-E 102°	27°	合口	有	小兒				
152	— 要	N-W 178°	—	—	—	成人	—	—	II	破 壊
153	要 要	N-E 19°	48°	合口	有	成人	胸二条	胸二条	I	竪棺のまわりに列石
154	— 要	N-E 105°	—	—	—	小兒	—	口下二条	I	破 壊
155	— 要	N-W 162°	24°	單	無	小兒	—	口下一条		
156	要 要	N-W 76°	1°	合口	無	小兒		口下一条	II	

番号	種類 上要下要	方 向	傾 斜	方法	粘土帶	大 き さ	凸 带		土 質 形 式	備 考
							上 要	下 要		
157										欠 番
158	要 要	N-W 92°	26°	合口	有	成人		胴二条		
159	要 要	N-E 91°	34°	挿入	無	小兒	—	—	II	上要の口縁を打ち欠く。
160	要 要	N-W 158°	30°		有	成人		胴一条	I	
161	要 要	N-E 66°	32°	合口	有	成人				
162	鉢 要	N-E 4°	ほぼ水平	合口	有	成人	口下二条		II	
163	—	—	—	單	無	小兒	—	—		(石横裏付)
164	— 要	—	—	—	—	成人	—	—	I	破 壊
165										欠 番
166	鉢 要	N-E 16°	40°	合口	有	成人	口下一条	胴二条	I	
167	盃 要	N-E 173°	6°	挿入	無	小兒		口下一条	III	
168	要 要	N-E 20°	39°	合口	有	小兒	口下一条	口下二条	I	
169	要 要	N-E 49°	28°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	II	
170	要 要	N-W 142°	37°	合口	有	成人		胴一条	I	
171	要 要	N-W 135°	30°	合口		成人	胴二条	胴二条	I	
172	要 要	N-W 25°	-2°	挿入	無	子供		胴一条	I	上要の口縁を打ち欠く。
173	鉢 盆	N-W 148°	10°	合口	有	子供		胴二条	I	
174	要 要	N-E 1°	36°	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
175	鉢 要	N-W 135°	25°	合口	有	成人			III	
176	要 要	N-W 170°	ほぼ水平	合口	有	成人	胴二条	胴二条	I	
177	要 要	N-E 26°	2°	合口	有	成人	胴二条	胴二条		
178	要 要	N-W 61°	34°							破 壊

番号	種類 上要 下要	方 向	傾 斜	方法	粘土帶	大きさ	凸 带		土面形式	備 考
							上 要	下 要		
II-1	鉢 要	N-W159*	24°	合口	有	小兒	口下二条 削二条	口下一条	II	上要朱
II-2	鉢 要	N-E174*	2°	合口	無	成人	—	削二条	II	
II-3	鉢 要	N-W128*	28°	合口	有	成人	口下一条	削二条	II	
II-4	鉢 要	N-W177*	33°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	II	
II-5	一 要	N-W167*	約17°	單	無	成人	—	削二条	II	
II-6	鉢 要	N-E162*	19°	合口	有	小兒	—	—	II	
II-7	鉢 要	N-W169*	3°	合口	有	小兒	口下一条	—	II	
II-8	鉢 要	N-E77*	17°	合口	無	小兒	—	—	II	
II-9	鉢 要	N-E37*	35°	合口	無	成人	口下二条	削二条	II	
II-10	鉢 要	N-E129*	21°	合口	有	小兒	口下一条	削二条	II	
II-11	鉢 要	N-W162*	34°	合口	有	小兒	口下一条	—	II	
II-12	鉢 要	N-W163*	30°	合口	有	成人	口下二条	削二条	II	
II-13	鉢 要	N-W166*	23°	合口	有	成人	口下一条	削二条	I	
II-14	鉢 要	N-W142*	約24°	合口	無	小兒	口下一条	口下一条	II	
II-15	鉢 要	N-W143*	30°	合口	有	成人	—	口下一条 削二条	II	
II-16	鉢 要	N-W165*	5°	合口	有	子供	口下一条	削二条	II	
II-17	鉢 要	N-W72*	39°	合口	有	小兒	—	—	II	
II-18	鉢 要	N-E74*	35°	合口	有	小兒	—	—	II	
II-19	鉢 要	N-W150*	約18°	合口	有	子供	口下一条	削二条	II	
II-20	鉢 要	N-E174*	-9°	合口	有	小兒	—	—	II	
II-21	鉢 要	N-W149*	28°	合口	有	成人	口下一条	削二条	II	
II-22	鉢 要	N-W165*	1°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	II	
II-23	鉢 要	N-W138*	-3°	合口	有	小兒	削二条	口下一条	II	
II-24	鉢 要	N-W144*	20°	合口	有	成人	—	削二条	II	
II-25	要 要	N-W155*	25°	挿入	有	成人	削二条	削二条	I	上要の口縁を打ち欠く。
II-26	要 要	N-E62*	約12°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	II	
II-27	要 要	N-W164*	9°	合口	有	小兒	—	—	II	
II-28	蓋 要	N-W151*	約20°	合口	有	子供	—	削二条	II	
II-29	要 要	N-W134*	約25°	合口	有	小兒	—	—	II	
II-30	要 要	N-W128*	約1°	合口	有	小兒	—	—	II	
II-31	鉢 要	N-W146*	19°	挿入	有	子供	—	削二条	II	
II-32	鉢 要	N-W152*	29°	合口	有	成人	口下一条	口下一条 削二条	II	
II-33	要 要	N-W117*	33°	合口	有	子供	口下二条	口下二条	II	
II-34	要 要	N-E131*	15°	合口	有	小兒	口下一条	口下一条	II	
II-35	鉢 要	N-E116*	18°	合口	無	小兒	口下一条	—	II	
II-36	鉢 要	N-W114*	24°	合口	有	成人	口下二条	口下二条 削二条	II	
II-37	鉢 要	N-E171*	31°	合口	有	子供	口下二条	口下二条	II	

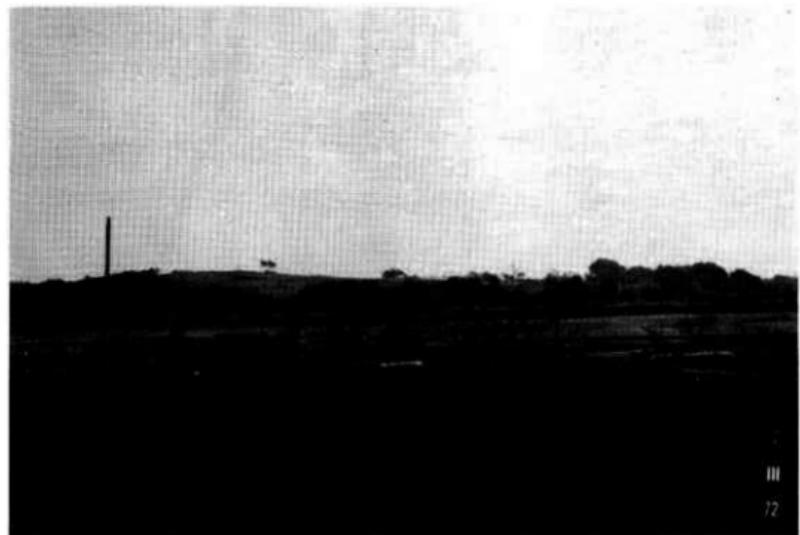
姫方遺跡石棺墓一覧表

番号	方 位	主軸長さ cm	側 壁		深さ(中央)	形式	備 考
			長 径	短 径			
1	N-W 48°	176	43	38	25	I	
2	N-E 37°	190	60	44	30	I	床頭部に扁平石
3	N-W 68°	150	41	34	57	II	
4							欠 番
5		182	36	24	28	I	
6	N-W 53°	175	40	22	25	I	
7	N-E 67°	約160	—	—	—		半 壤
8	N-W 88°	158	31	(15)	30	III	
9	N-W 75°	—	(20)	—	30	II B	半 壤
10	—	—	—	—	—		破 壊
11	N-E 80°	—	(31)	—	約25	I	半 壤
12	N-W 78°	166	43	32	35	II B	
13	N-W 64°	108	35	30	45	III	
14	N-W 27°	121	37	34	32	I	
15	N-W 51°	173	41	32	33	II A	
16	N-E 84°	約160	42	33	20	I	
17	N-E 85°	122	37	36	35	I	
18	N-W 88°	110	31	24	約20	I	
19	N-W 63°	100	23	22	22	I	
20	N-E 46°	142	41	35	30	I	床面に扁平石
21	N-E 37°	151	46	35	45	II A	鉄 刀
22	N-E 53°	151	28	27	20	II A	
23	N-E 57°	168	39	21	45	II C	
24	N-E 35°	68	17	16	19	I	
25	N-E 36°	163	34	25	22	I	

図

版





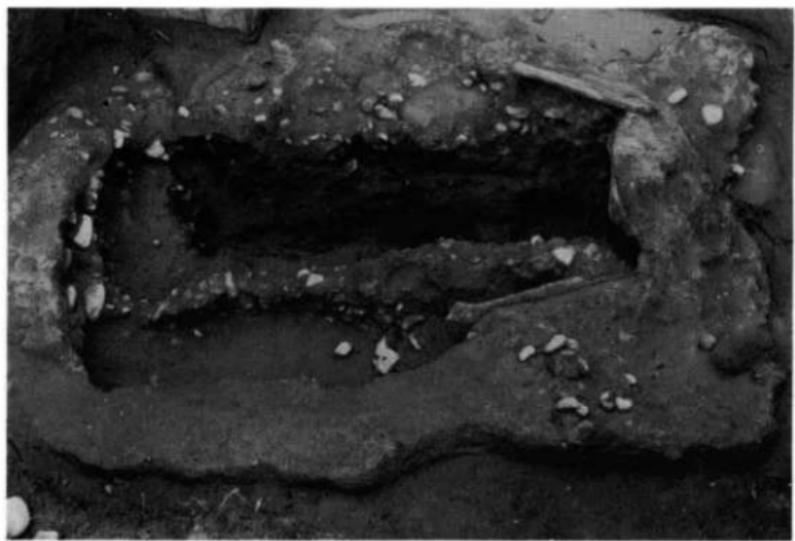
1. 姫方遺跡の遠景（中原小学校付近より）



2. 雌塚から筑紫山系を望む



3. 雄塚・雌塚（右側）の全景



4. 雄塚の内部主体



5. 雌塚の内部主体



6. 環状列石土塙墓



7. 方形周溝墓（発掘前）



8. 方形周溝墓



9. 方形周溝墓の南溝断面



10. 方形周溝墓の北溝断面



11. 方形周溝墓の西溝



12. 方形周溝墓南溝の壺形土器



13. 第23号石棺墓  
(蓋石)



14. 第23号石棺墓



15. 第21号石棺墓（蓋石）



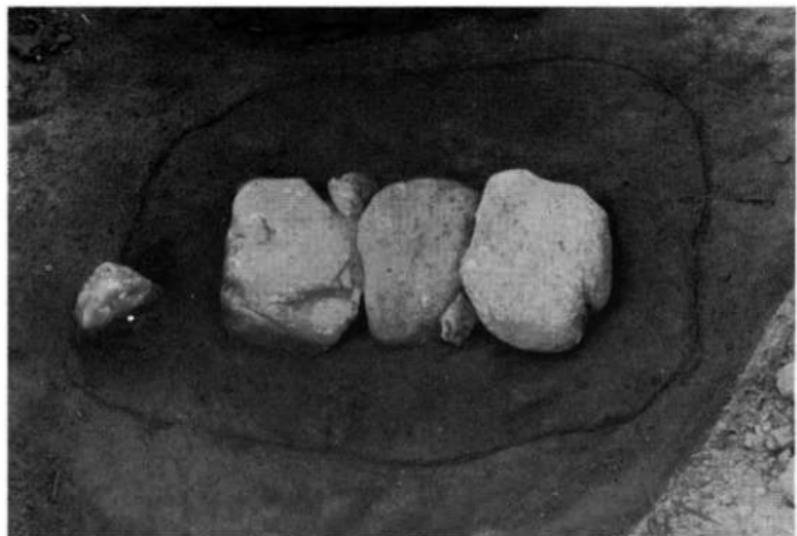
16. 第21号石棺墓



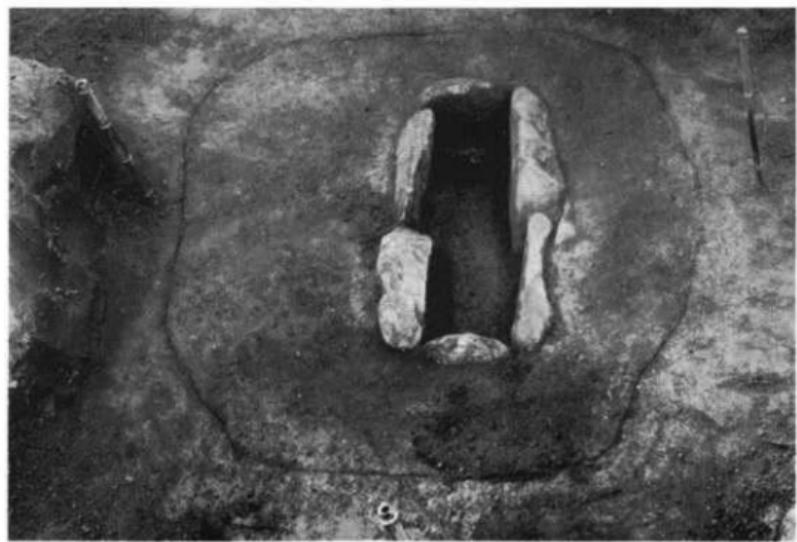
17. 第21号石棺墓の断面



18. 第12号石棺墓



19. 第24号石棺墓（蓋石）



20. 第24号石棺墓



21. 第25号石棺墓（蓋石）



22. 第25号石棺墓



23. 第Ⅰ区甕棺墓の分布状況



24. 第Ⅱ区甕棺墓の分布状況



25. 墓棺墓の小集団（第Ⅱ区）



26. 墓棺墓の小集団（第Ⅱ区）



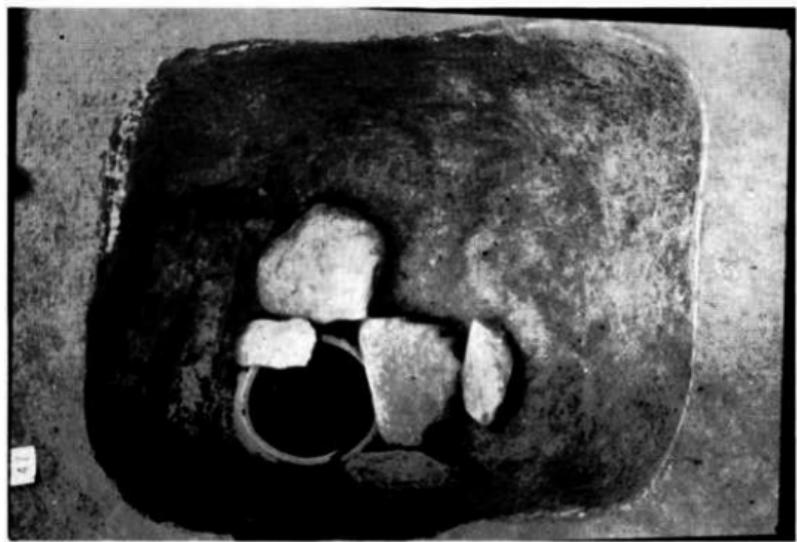
27. 第153号环状石瓣葬棺墓



28. 第153号环状石瓣葬棺墓



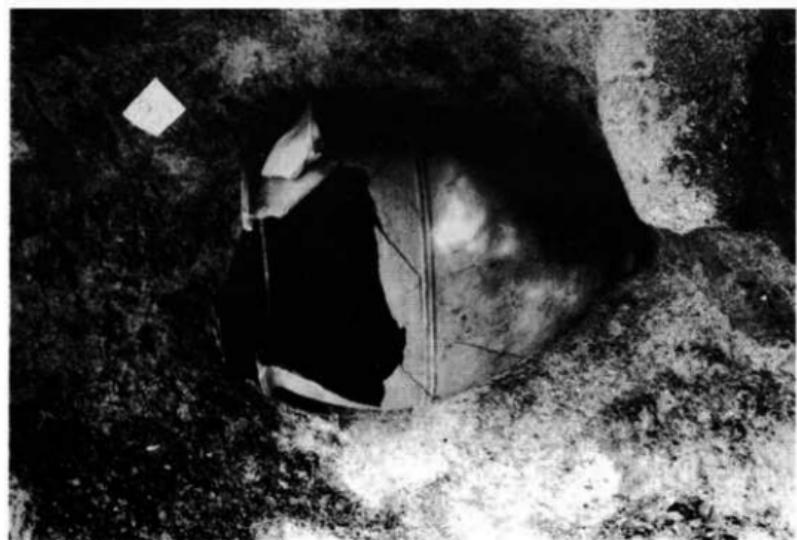
29. 第163号石積甕棺墓



30. 第47号单甕棺墓



31. 第Ⅱ—25号大形合口甕棺墓



32. 第Ⅱ—31号覆口甕棺墓



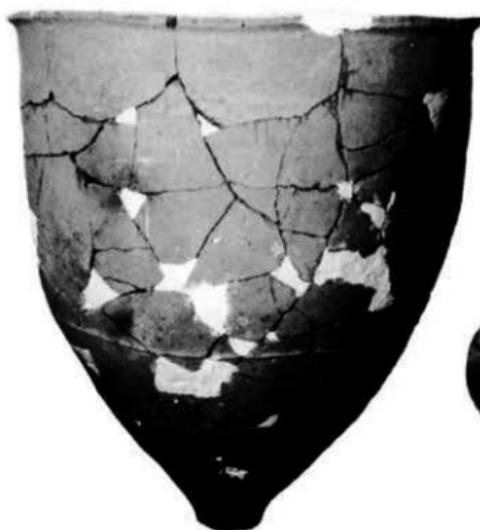
33. 第42号甕棺



34. 第2号甕棺



35. 第129号甕棺



36. 第4号甕棺



37. 第173号甕棺



38. 第II-35号甕棺



39. 第II-1号甕棺



40. 第123号甕棺



41. 第111号甕棺



43. 第II-10号甕棺



42. 第37号甕棺



44. 第121号甕棺



45. 第3号漆棺



46. 第II-24号漆棺



47. 第99号漆棺



48. 第108号漆棺



49. 第167号甕棺



50. 第48号甕棺



51. 第39号甕棺



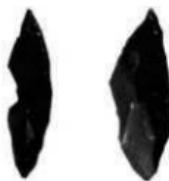
52. 第47号甕棺



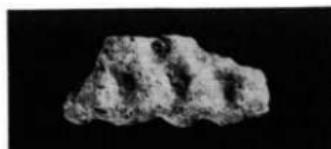
53. 住居址



54. 炉址 (住居址)



55. 石器 (表採)



56. 縄文式土器 (表採)



57. 石劍 (第5号土塚内)



58. 貝劍 (第3号甕棺内)



59. 内行花文鏡 (堆塚)



60. 鐵刀 (第21号石棺内)

## おわりに

(1) この遺跡が墓制史上にしめる価値の重要性によって、この遺跡の中、次の3遺構が保存され、昭和49年2月25日、佐賀県文化財保護条例により佐賀県史跡に指定された。

雄塚	1基
方形周溝墓	1基
環状列石土塙墓	1基

(2) この報告書の編集計画をはじめ、実測図・写真・記録等の整理および編集は、木下巧・天本洋一が当った。本文の執筆担当者は、次のとおりである。

I 遺跡の環境	木下之治
II 調査の概要	木下之治
III 遺跡・遺物	
1 雄塚	木下之治
2 雌塚	木下之治
3 方形周溝墓	木下 巧
4 環状列石土塙墓	木下之治
5 土塙墓	木下之治
6 石棺墓	木下 巧
7 墓棺墓	木下 巧
8 住居址	柴元静雄
9 その他の遺物	天本洋一
IV 総括	木下 之治

(3) 本書の出版に当っては、中原町当局から多大の援助をいただきました。末尾ではありますか、厚くお礼申し上げます。

佐賀県文化財調査報告書第30集

## 姫方遺跡

印刷 昭和49年3月25日

発行 昭和49年3月31日

編集 県教育庁文化課

発行 佐賀県教育委員会

印刷 佐賀県印刷局

